家庭雜誌

第六拾七號

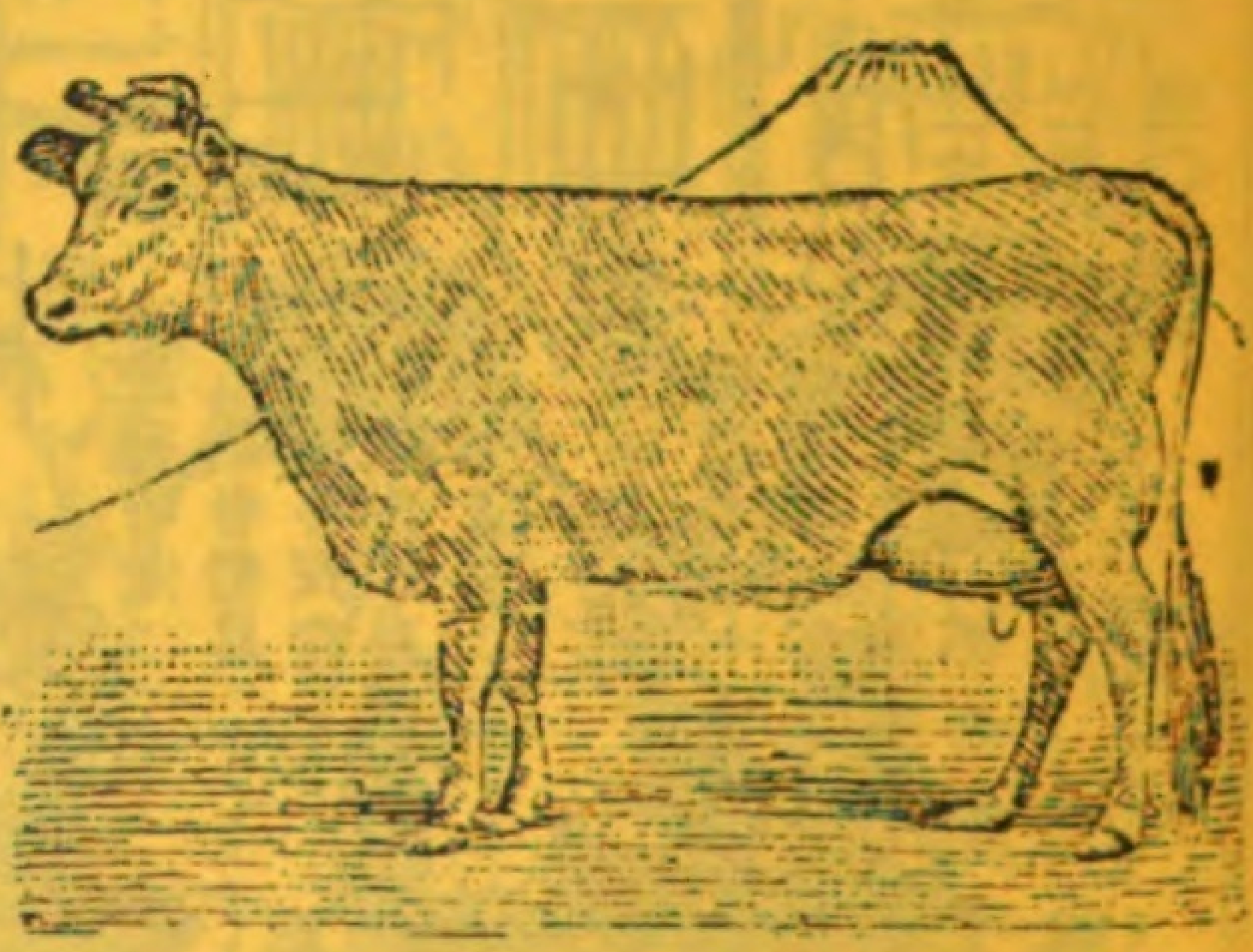
ズラルス 定價十八錢 郵稅四錢 ◎第四版近松門左衛門 定價十八錢 郵稅四錢 ◎第四版格
武雷 定價二十錢 郵稅四錢 ◎第四版幕府衰亡論 定價卅五錢 郵稅六錢 ◎第三版武備教育 定價十錢 郵稅二錢
定價十二錢 郵稅二錢 ◎第三版玩具と遊戲 定價十錢 郵稅二錢 ◎第三版小兒養育 定價十錢 郵稅二錢
◎第三版家庭衛生 定價十錢 郵稅二錢 ◎第三版社交一斑 定價十錢 郵稅二錢 ◎第三版文
明之弊及其救治 定價十錢 郵稅二錢 ◎第三版現時之社會主義 定價十二錢 郵稅二錢
第三版白晳人種の前途 定價十二錢 郵稅二錢 ◎第三版責任內閣 定價十錢 郵稅二錢 ◎
第三版大日本膨脹論 定價十錢 郵稅二錢 ◎第三版臺灣 定價十錢 郵稅二錢 ◎第三版カー
ライル 定價十八錢 郵稅四錢 ◎第三版ゲーテ 定價十八錢 郵稅四錢 ◎第三版進步乎退步
乎 定價十錢 郵稅二錢 ◎第三版最暗黑の東京 定價十三錢 郵稅二錢 ◎第三版懷舊 定價二十錢 郵稅四錢
◎第三版伊太利建國三傑 定價二十錢 郵稅四錢 ◎第三版懷往事談 定價二十錢 郵稅四錢
◎第三版歷史之片影 定價二十錢 郵稅四錢 ◎第八版新日本史 定價四拾錢 郵稅六錢 ◎第
六版誕生日 定價十五錢 郵稅二錢 ◎第四版今世名家文鈔 定價二十錢 郵稅四錢

若夫れ出版日新たにして今初版再版の中に在る者亦必ず他日前者と同一以上の面目を施べきを信ず歲暮年始の送品に最適當なる民友社出版物は現今其品を缺かさず迅速世の需めに應ずるの準備をなせり續々御注文冀上候

乙未冬十二月

東京京橋區日吉町

民友社 敬白



家庭雜誌

○每月二回十日廿五日發兌

定價

一冊　金五錢　郵稅　金五錢五厘
半年(十二冊)前金五十錢　地方稅　金五十六錢
一年(廿四冊)同金一圓　共　金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人　金子佐治郎
編輯人　金子佐平

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

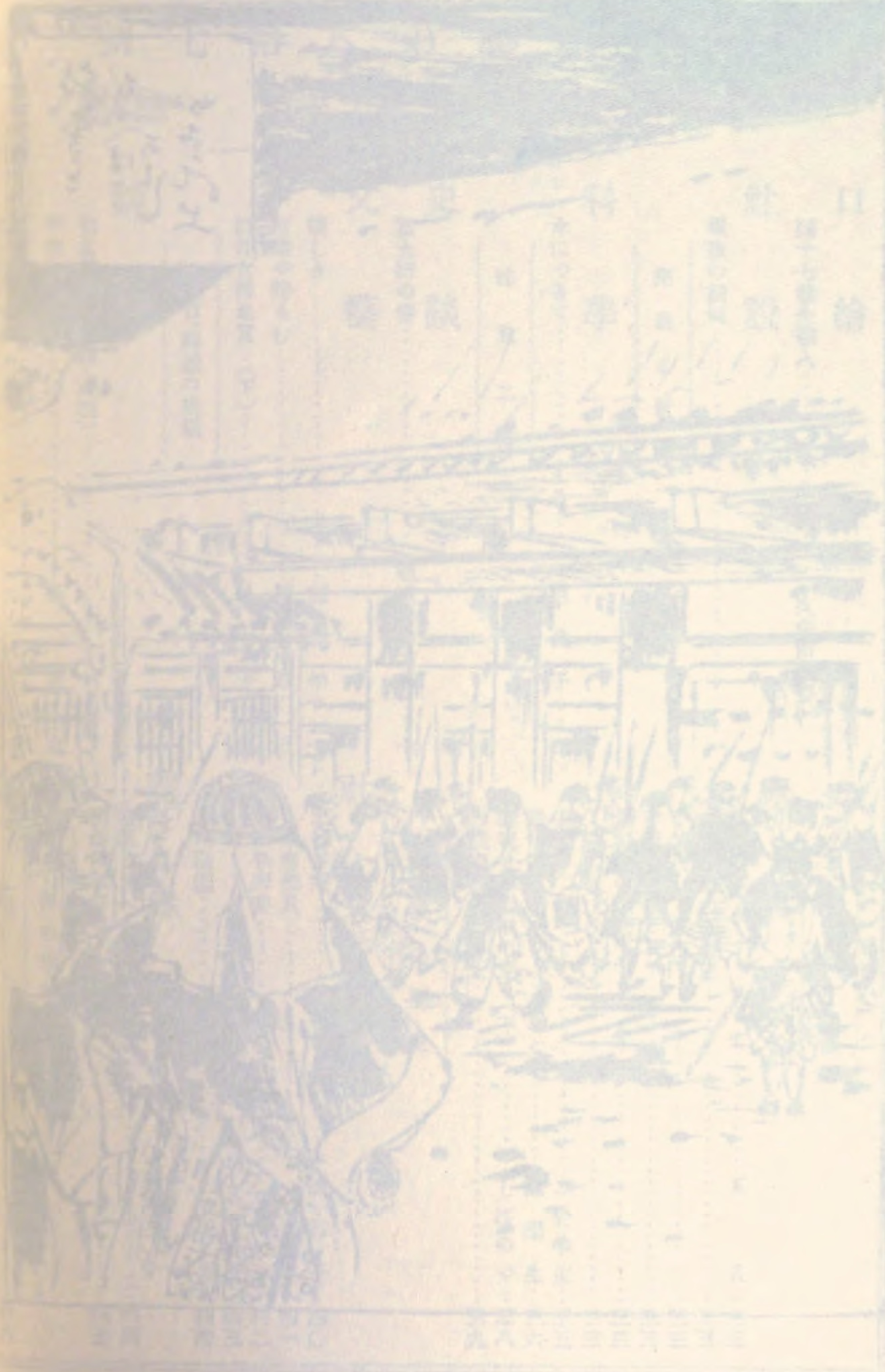
明治廿八年十二月十日發行

家庭雜誌第六拾七號

目錄


我雪と
おもへはかろし
笠の上

明治廿八年十二月十五日發行



家庭雜誌第六拾七號

（明治廿八年十二月十日發兌）

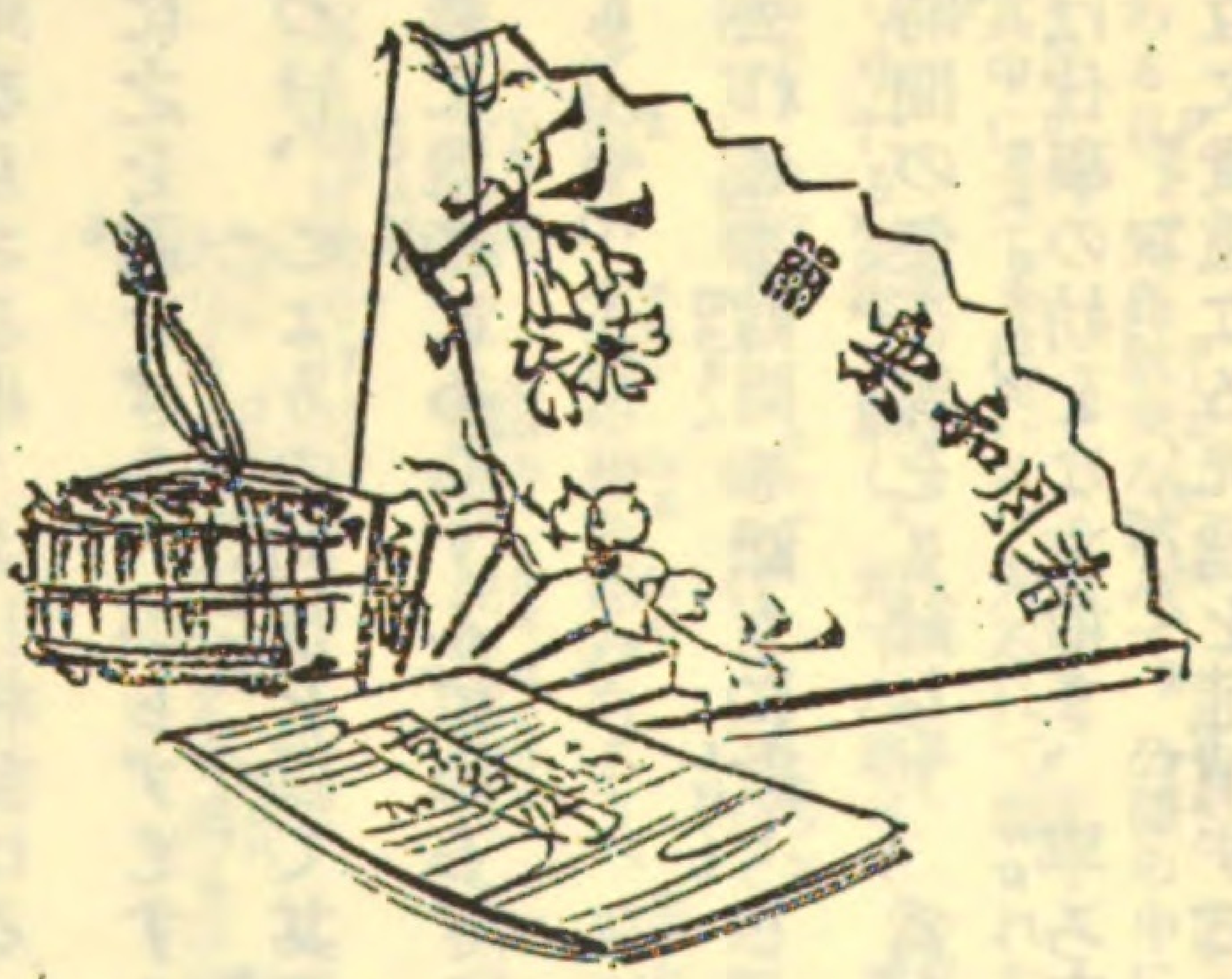
社説

親族の訪問

事繁き世にありては、親子兄弟の間も始終同居して日常相見る能はざることあるは免れ難き所也。

人稍長ずれば學校に寄宿せねばならぬ事もあるべく、各自世に立ちて夫々業に就くに及びては、或は商賣の都合により、或は出仕する官衙學校會社等の便宜の爲に、銘々適當の所に宿所を定むる必要ありて、東京に住むもあり、大坂に住むもあり、同じ東京にても日本橋に住むもあり、芝に住むもあり、本郷に住むもあるべし。

斯る場合に當りては、互に間暇を求めて親族間に適度の訪問をなすこと、人生何よりの樂事なるのみならず、相互の交情を煖むる爲に、極めて緊要事件なり。



朋あり遠方より來る亦樂しからずや、矧して親しき骨肉親戚の間にて、遙々尋ね來るが如き樂みはまた格別也。

故に業務の都合により出張先きより多少の餘閑を得て立寄るに、さしたる廻りにあらざる時の如きは、成るべく相訪問して一夕の情話に五年三年の交を煖むべく、又地方に住みて見物かた〳〵都會の親族を見舞ひ、或は都會より物珍らしき地方に至るなど、お互に言ふべからざる興味あるべし。

唯に男子の間に於て然かすべきのみならざる也。又用事の序を以て然かすべきのみならざる也。花の頃紅葉の日など、或は夫妻相連立ち、或は母子相伴ひ、或は姉妹弟兄打連れて、親類緣家を音づるゝ等、其利益と其樂みとに於て或は半日の暇をつぶし或は數日の旅行をなすの勞を償ふて餘りあるべし。

昔唐の詩人岑參は韋員外兄弟三人睦まじく花下に歡讌することを歌ひて、今年の花は去年の好きに似たり、去年の人は今年に到て老ゆ、始めて知る人老て花に如かざることを、惜むべし落花君掃ふこと莫れ、君が家の兄弟には當るべからず、列卿御史尙書郎、朝より回て花底恒に客を會す、花は玉缸を撲て春酒香、といひたりき。彼等が相樂むさま想ひやられていと床しきぞかし。

然るを互に事務の忙はしければとて久しく音づれもせず過ごすは、別るゝものゝ日に疎きならひとして親しき骨肉の間と雖遂に同情薄きに至ることなきを保すべけんや。人の世に在る有爲轉變定めなし、何れの時に如何なる災禍によりて困厄に陷ることあるも知るべからず。まさかの時に眞成にたよるべきものは親族より外ならざる也。よし相救はるゝことは親族の間と雖嚴に之を避けざるべからずとするも、樂みにつけ、憂につけ、心よりの同情を以て其憂を憂ひ其樂みを樂むは竟に親族にあらずんばあらざるべし。相疎んじて可ならんや。

去れども訪問も餘りに數くし、若くは他の業務の都合時間の便否等をも計らず、爲に興味の索然を致し、或は仕事の妨をなす如き、寧ろ害ありて益なきこと也。互に貴重なる光陰を徒消するのみならず、煩はしき待遇の用意の爲に、遂に相厭ふに至るを保すべからず。」

人は常に珍らしきを愛するもの也。親みを增すの道は疎からず煩はしからざる來往に在り。君子の交は淡き

こと水の如しといへり、其淡きは情に於て謂ふにあらず、形式に於て謂ふのみ。親族の間は情交を主として、飲食送迎の待遇は成るべく簡易なるを要す。是れ實に其情交を厚ふし且つ永ふする所以なるを知らざるべからず。

要するに親族間に於ける適度の訪問は人生樂事の第一にして、一方より見れば亦親族相對する義務の一ならずんばあらざる也。



兜蟲と蚯蚓

夏の日、兜蟲蚯蚓に逢ひ、尙武の氣風の必要を說き、己が威風ある武裝の體を示し、又大木を貫く其腕力の程を誇り、何事をも爲し得ずして、土の中に生涯を送る、蚯蚓の無氣力無精神なるを、笑ひ辱しめ、自ら武士軍人と稱して、蚯蚓を土百姓なりとて、甚だしく賤しめけれど、蚯蚓はかゝる暴言を聽くべき耳なきにや、一向心に留むる樣子もなく、靜かに去り行きて、平常の業務を執り、上層の土を下層に、下層の土を上層に運ぶことに、餘念なかりければ、其後兜蟲は蚯蚓に逢ふも、共に語るに足べき者にあらずとて、常に振向もせずして、行き過ぎけり。

ある日、兜蟲散步を試みて、公園の中に到りけるとき、數多の人集りて其中に立てられたる、大石にて築かれたる、武功紀念碑の傾きて頽れかゝりたるを取り崩し、地下を掘りて、其原因を正し居るを見て、兜蟲も潛かに近寄りて、窺ひけるに、全く蚯蚓の、石の下に無數の穴を穿ちたるに由り、土臺の弛み始みたると、明かに分り來りければ、其の侮り難きに舌を捲いて驚き、先の虛勢にも似ず、直ちに羽を擴げて、何處ともなく逃げ去りけり。



大なる働は見ねざる處より起る

科學

水につきて

白光子

涓滴の水

博士ホドソン氏、千八百八十九年開會せし顯微鏡學會にて一滴の水につき講演すらく、

綠草の幹に橫はる一滴の水中にある驚異すべき一世界を凝視せんには、透明なる生活せる機關なるものありて絕へず活動するを視る、其活動法の面白きとを視、針頭の如き滴水中を往來し上下する極微動物を注視し、種々の色彩を有し、燦然として光輝を放てる其結晶せる武裝を視、顫動せる睫毛は光輪となりて、其動物の頭を飾れるを視、綠玉の如き草莖を滑走して糧食を狩り、餌物に飛びかゝり、畏るべき程强猛なる感情を以て雌雄相違ひ相求め居る狀態を觀時としては狂せんばかりの舞蹈を演—、左跳右飛一上一下し、彼等獨特の音曲を奏し、生物中の微妙完全なる幸福の音曲を奏して居るとを觀、再び去て再味なる書籍或は書圖を觀は、誰か仙境を出で丶俗界に入るの感なからんや。



是れ涓滴の水の美也、雪原、氷田、飛瀑、野水、江河、沿池、淵湖、大洋に到ては汚物を洗ひ出すのみならず、觀瀾の人をして腦髓の過勞を醫し健全と强力を恢復せし

むるに足る。

博物學の研究は、吾人を誘ひて田舍及び戸外に出掛けしむるの利益あるものなり。

湖水は河川及び海洋よりも靜なり、河川は緩に流れ來り流れ去るも、海は活動と勢力に富みて、鏡の如く平なるは暫時のみ、湖水は眠に落ち佳夢を貪ぶるもの、如し、絶景中に憇へる湖水は、瀟麗なる衣裝を飾る白銀の如く、美顔に耀く明眸に似たり、丘陵若くば絶壁より湖水を下瞰せば、湖水は宛がら何か大なる碧色の結晶體の如く全く固形躰の如く視ゆるなり。

河　　川

古往今來人の河畔に住するを好むは、商業、交通の便のみに非ず、詩人デーヴオルズ歌ふらく。

斯くて我は原野さ牧場を望み
日毎に清けき河畔を逍遙するを得ん
雛菊や青き菫花の匂ふ其中を
紅き風信子、黄色の水仙の咲ける間を

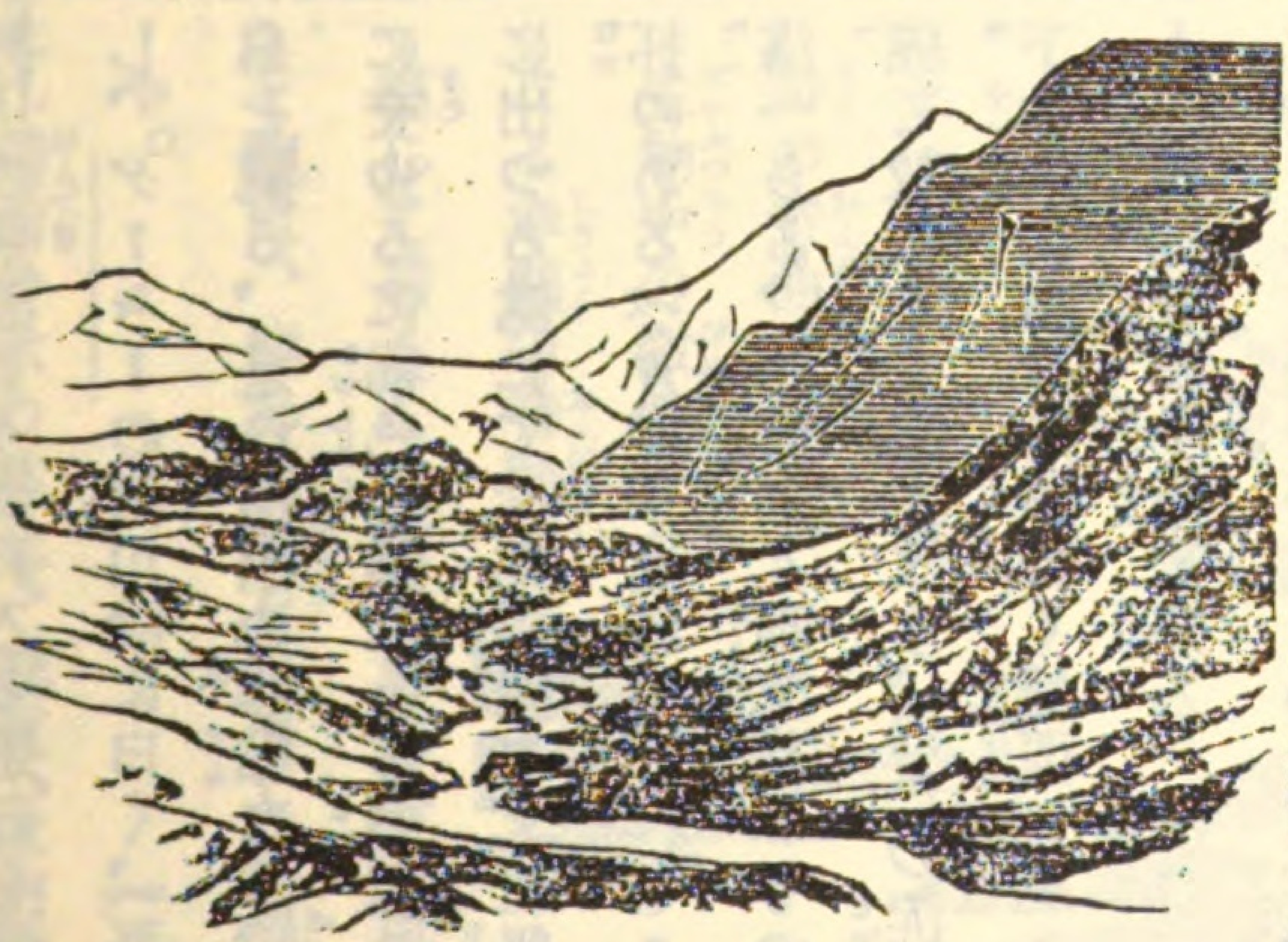
河川の泉源より海に入る道行を尋ぬるは面白きこと多し、ゲーキーの河川論に曰く、『吾人は丘陵の頂上にて泉を觀る、是れ河川の起點なり、鮮緑なる一片の地帶に交ゆるに褐色の雜草ある斜坡こそ、水の始めて表面に出つる處にて、其周圍などは綠苔青々として生し水杯のあるべき樣子更に無けれども、深き溜往々其下に湛へらる、此源より潤流なるもの、葉末を潜り苔上を經て數條の支流となり、黑色の泥炭層ある處に達せば、下水溝に於けるが如く捷徑を追ふて流れ出す也、是より泥炭地層に小溝を穿ち、流れて土壤に入る、土壤には時として巖層の處もありて泥炭にて晒され、白色となれる地もあり、水量は增し斜面は急になりて、水路漸く廣く且つ深くなり、丘側を蔽へる解體巖を除き去り、地面に堆積せる碎石の上表に達し、都合よき地方

にては、數年ならずして二三十尺の深さある急下せる溝となるに到るなり。』と

氷　　原

瑞西の河川の源を探らば、吾人は概ね高山秀嶺の山肩に蟠れる雪野（Névé.）より來れるを視るべき也。雪野の下には氷原あり、氷原の上、中、及び下には千萬の小泉ありて縱横貫流し、時としては美はしき碧潭を構成するゝあれば、氷原の終は土石の間に隱るゝもあり、最高のアルパイン山の谿谷は、概して稀に荒蕪し、稍ゝ峻嶮なるのみ、シント、ゴサードの高谷の如きは其一例也、兩側は砂礫凸凹せる牧場を控へ、野花三五其間に笑ひ、怪巖土塊相錯布し、谿底には泡沫雪花の如き急湍の飛下するを觀る、白雪を冠せる峻峯は丘陵の肩背に隱顯す。

谿谷は下るに隨て濶くなり、千姿萬態を顯はし、一幅の畫圖を描き出す也、雪嶺及び傾斜面は漸く仰き視るとを得るに到り、牧場即ち〝Alps〟には、夏時千百の牧牛茲に息ひ、茅屋參差として綠野の間に點綴し、牧鐘遙に響てアルプスの高臺靜を破る。漸く下るに從て



嶮を增し、樅、杉、松、柏など立ち列ひ、更に下て山毛欅あり、栗樹あり、アルプス山谷の中央部は半は耕種に適し、半は牧場に適せり。而して牧場地には鐘形花、野葵、チァーヴ井ル、ラッゲッド、ロビン、水仙等咲き競へり、牧場は灌漑水利の工事行屆き、水力驅て水車に使用せられ、河水曲折奔馬の如し。ラス

キソ謂へるあり『水は水車を轉する其業を樂み、若くば其任務牧場に適す』と。

注意二件

京橋區南小田原町二丁目十二番地舩大工職國澤鐵太郎妻トキ(二十四年)は去月十七日分娩の二男金次郎を一昨夜十一時頃より例の如く添乳して其儘寢入りて翌朝目覺し見るに小兒は惣身冷果てゝ已に絶命し居るに打驚き早速最寄の醫師を招きて介抱せしも死後數時間を經たる事とて治療を施す術もなく全く母の不注意より乳房にて鼻口を蓋ひ爲めに窒息せしめたるものなり

麴町區富士見町一丁目十八番地井上文次郎の妻セキ(五十六)は娘タマ(十六年)と兼て懇意なる同町九番地洋服裁縫職手島太郎の二女德枝(五年)の二人を伴ひ九段坂の下の或る飲食店に用達に赴き歸宅の途次タマは德枝が所持し居る金柑を取らんと爭ふ内德枝は右の金柑を口中に入れて鵜呑にせんとせしも咽喉につかへて苦しみ居るをセキは見るより打驚き介抱せんと彼是する内呼吸止りて無慘にも其儘遂に絶命したれば此由急ぎ最寄の巡査派出所に訴へ手當を乞ひたるより醫員等馳付け治療を施したるも其詮なく死體は親許に引渡されたりと云ふ

史談

富士野の譽(三)

嵯峨のや主人

第六　曾我兄弟の家庭(其二)

箱王が今の父曾我祐信は誠の父でなく、産の父は其名を河津三郎助通と云て、坂東一の剛者、一年赤澤山の狩倉の歸り、近江八幡が卑怯の矢先にかゝッて、あへなく最後を遂たのだと知ッたのは、彼が七歳の時の事で、彼は之を知るや、母の膝に取附ながら、なう母御前、我等が眞の父は佛になりたまへりと歟、我は遇たう思ふなり、其佛に遇はせてたべいざ疾くなうとせめました。母は昔を思ひ出して、今更の樣に歎きながらも、いやとよ、御身達が父は曾我殿なるを、其方は異な事を言はるゝものかな、と口には强く言ッたものゝ、目に溢る涙の露は、却て眞を語て居ます。之よりして箱

王は父の死を眞と信じたのでした。

兄弟が父を慕ふ孝心の深き事に就ては、曾我物語は吾人に左の事實を語て居ます、

斯て夏も過秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出て遊びけるに、五つ列たる雁金の、南をさして飛けるを見て、一萬申けるは、あれ見給へ箱王殿、空に飛ぶ翼も、みな別の翼ぞまじへざりける、五つつれたる鳥の中に、一つは父一つは母、三つは子どもにてぞあるらん、物言はぬ鳥類さへかくの如し、われ等は人倫に生れながら、和殿は弟我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿は實の父にて、ましまさぬこそかなしけれ、我等が父をば河津殿と申して有しとかや、父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持て、今ぞ思ふ樣に物を射ありきなん、我々より幼き者にも、馬鞍弓矢を以て、物を射ありく事の浦山しさよ、これらの事どもおもひつゞくれば、いつより今宵は父御前の戀しくおはしますぞやとて、袖に顔をさし入て、さめ〴〵と泣ければ、弟も小賢しく、顔を合せて泣居たり、一萬の乳母の女房、これを聞つゝ、あな淺まし人もこそきけ、いかに和上郞達、夜も更ぬるに、さやうにては御坐すぞ、とく〳〵入せ給へ、と怖しげに云ければ、二人の者は門外へ迯出て、おもふ樣に飽まで泣て、後に内に入にけり、其後は二人の者共、我身の程を知ぬれば、おくれし父を慕ひつゝ、語り合する迄はなけれども、唯目ばかりを見合て、互に袖をぞ濡しける、又或時兄弟は、竹の小弓薄矧の小矢をとり副て、遠侍に出て遊びけるが、あかり障子の有けるに二人立むかひ、あなたこなたへ射通して、一萬箱王に申しけるは、我等もいつか成長し、和殿十三、我は十五にだにも成ならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵祐經を、此如く差合て射とりつゝ、後には兎も角もなりなん、和殿も弓よく射習給へ、我も

射習はん、弓矢は男の一の能にあるなるぞといひければ、弟も打うなづきて領掌しけり、
是曾我物語が吾人に語る所で、然して此事が二人の母親に聞えし時、母親は如何に驚いて其をいろ〳〵と説諭し、思ひ止まらせんとしましたろう、然し兄弟が父を討せて、口惜しいと思ふ心は、此頃より愈深く、其より後は人の聞ぬ所では、折々此事を言ひ出して、互に慰め勵して居たが、其間に光陰も矢の如く過去りて、一萬十三歳、箱王十一歳となりました、此に於て一萬は元服して曾我十郎祐成となり、五郎は出家の爲めとて箱根へ押登さるゝ事となッて、分つに難き恩愛の袂も、運命には敵し難く、兄弟なく〳〵東西に分れて、此に彼等の家庭も其第二期を終る事となりました。
但し兄弟の家庭の生活が、如何なる有様に於て有た歟は、曾我物語の語る所簡單で分りませんが、然し普通一般の若殿原さへ、當代の坂東武者の教育として、馬に乘り、弓矢をとッて、山野を狩倉するなぞが、其平生のたしなみなれば、まして讐討の願ある二人に於ては、乘馬、射藝、太刀打の術は、最も出精して學びし所、其平生の遊戯の間にも、弓に矢を矧で、鹿を射、兎を狙ふなぞは常の事で有たらうと想像します

第七　流浪の兄弟

箱王箱根山に登て後は、出家になる稚兒の事なれば、經をも讀み、手習をもすべき筈だが、彼は望みある身なれば、其等の事には更に管はず、或は手綱もなき牧の野馬に打跨て山野を飛び歩き、或は棒を揮て太刀打の術を試み、或は箱根權現へ祈誓を籠て本懷を遂させたまへと願ふなぞ、更に出家の心掛は有ませんでした
斯て居ること六年、十七歳の九月上旬、別當が彼を出家にするといふを聞くや、彼は其前夜山を下て曾我の里へ歸り、兄十郎と相談の上、北條時政が館へゆきて、

其を烏帽子親に賴み、男になりて名を五郎時致と附ました。然し此事甚だ母の心に違ふ所とて、彼は母の勘當を受け、行くに宿なく、歸るに家なく、流浪の身となりました。五郎が流浪になるや、十郎も家に宿る事少く、兄弟二人打連て、親類緣者を其から其と泊歩ながらも隙もあらばと祐經の身を伺ッて居ました。十郎が大磯の虎が元に通ッて馴染を重ねたのも此頃の事で、又賴朝が淺間那須野の狩倉に隨ひて、泊々の宿場は勿論、此處彼處の狩場々々でも、晝夜となく敵を附狙ッたのも此間の事で。又其親類緣者の若殿原と共に、或は馬を追ふて野原に狩し、或は的を立て弓術を試み、或は太刀打の修練を爭ひ、或は東西に分れて角力を取るなぞ、專ら武を磨ぎ力を練ッたのも此間の事でした。然も彼等は君の覺えわるき日蔭者の事とて、身を狹め世を憚て居たに違ひなければ、其に附ても仇を憎むの心は、いよ〳〵益〳〵深く、之を狙ふの心益〳〵堅くなッたのも、又此間の事でしたらう。然し敵の用心嚴しくして、終に本意を遂るの期は有ませんでした。然るに幸なる哉、建久四年五月に至りて、賴朝富士野の卷狩を思ひ立ち、坂東の若殿原我も〳〵と隨ゆくより、兄弟の者は大に喜び、時こそ來りぬ、此時讐を討ざれば、又何れの時を歟期すべきぞ、とまたもや馬に鞍を置くこととなりました。

第八　戀人の離別

十郎の愛人虎と離別の時、今度富士野の御友は、敵祐經を討ん爲なれば、生ては再び遇はるべからず、と實を告て名殘を惜むは、少し不覺の心かと思はれます。然し後朝の別の際、虎が着馴た綾の小袖を脫いで、十郎の着馴た目結の小袖とかへ〳〵に着て、

板間より別れて後の悲しさは誰に語りて月を眺めん

と詠み、十郎が涙ながら

なからへん人わするなよ我とても死しての後も忘る

べからず

と詠み、其より虎が大磯へ歸るを送るとて、曾我中村の境の山彦山の麓に駒を並べて、盡ぬ名殘に目も暮れ心も消ながら、

十郎

紅のふり出てなく涙には袂よりこそ色まさりけれ

虎

紅の戀の涙のいかなれば果は朽葉と袖をなすらん

と咏みしに至ては、如何にも哀にして、其心さまのやさしい所も見えて居ます

別れんとして別れ難く、手を採て共に泣き、既にして思ひきッて駒を東西に歩ませながら、又ふり返りて消ゆる思ひに、虎手を擧て今しばしとさし招けば、十郎も力なく〱又引返し、駒を並べて言葉はなし、

汝後來如何なる終局を成さんやと云ふに着眼せんよりは寧ろ今日如何にして光陰を費さんと云ふに注意すべし

（ヘンリー、マルテイン）

文藝

嬉しき

畵少年

嬉しと思ひし事は忘れがたきものなり、殊にまことの愛によりて色どりせられし嬉しき事は、常に忘れがたきものなり。駒込を通るごとに、われの忘れんとして忘れがたきは、この種の嬉しき事なり。夏の日吉祥寺の前を過る人は、今も尙ほ道の傍に新むぎこかしと筆太にかける紙旗の、風にひるがへるを見るなるべし、此所をすぎて十數町妙義坂に不動堂あり、今は堂守の人ありやなしや知らねど、吾の幼なかりし頃は、日ねもす燈火を絶たず、ほとりに信心の人も多くありて吾

父君も其一人にましましき。ある年の夏吾は父君に代りて片日影の出來しころこの堂に詣でんとて家を出でぬ。道のほども近からぬに、まして此あたりの田舍めきたる景色は、子供心にも面白く覺へて、あゆみもはかどらず。おろがみ終りて歸り路につきし時は、はや日も西に入りぬ。吾家の近くなる白山下は、その頃未だ一面の田甫なれば、獨り途の淋しさを想はれて、すゞ風ふく夕暮なるに尙ほ汗ぬぐひつゝ、ひたすらにみちをいそぐに、不圖目につきしはかの紙旗なりけり。日ごろ父君のいたく好ませ給ふを知るものから購ひ歸りて喜びの御おもてを見まつらんと思ひしがけふしも折角に請ひうけたる吾がたもとのもの歸るさにはあれ買はんこれ求めんと、來るみちすがら樂にせし、その望を空ふするは、なにとなくのこり惜しくかにかくと思ひわづらひ、知らず／＼ゆき過ぎぬ。

吾はあゆみをとめぬ。思ひ起せば吾の家にあるとき、外より歸りませし父君のたま／＼家土產を手にしたまふを見し時は吾心はたゞ嬉しさにうたるゝのみ、ましてそのものゝ吾が好める品なるときは、いひ知らず喜ばしく悟られまじとつとむるも、笑顏はつゝみがたかりしなり。父君とてなどわが心に異りあるべき、吾がたのしみは、またの日滿たすことを得べし、この家土產は再びする事かたしと、かく思ひかへして、いま來し道へと步を移しぬ。

たゞ一つ、低き空にあらはれし星は、やうやくに光をまし。兩側の家ゝ二つ三つともし火ひらめき、たが家の蚊遣かたちのぼる煙りかすかに、次第に黑みゆく一むらの林を越して、おぼろげに白きもの見ゆるは、かの紙はたなり。詮なきもの思ひに遠く行過しを悔ひつゝ漸くにいたりつきて、新らしきをゑりもとめてたびはさきにもましてみちをいそぎぬ。

指ケ谷町のあたり、行き逢ふ人もまれに、右も左もた

ゝ青田のみにて、蛙のかしましくなきたつるに、さきには一つなりし星も、いまはいたくその數をまして、白茶色なりし西のそらも名ごりなく暗ふなりゆき、を



り〳〵北の方に電のひかりて、青白く田の面をてらすなぞ、常ならましかば、吾がさす方にゆく人まちうけて、おそるおそる過るなるに、今宵はさして淋しとも思はず、ゆく道にまひあがりまひさがる、數多き螢火にも心とまらず、只一ときも早く父君喜ばせたく、心のうちに父君の笑顏のみ描きてひとり樂みつゝ、いつしか田甫もこえて町に入りしに、俄に心づきてあゆみをゆるめ、さあらぬさまにて吾家の門を入りぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

只一袋の麥こがし、父君の喜び給ひしは吾が思ひしにもまさりて多かりし。よくこそ氣のつきたれ、香り慕はしくおもひしおりなれば、このむくひにはふさはしからねども、うち笑み給ひて吾の日頃望める日本外史買ふことをゆるし給ふ。

まことに嬉しといふ事を、吾のふかく感ぜしはこのときなり。此夜の夢は、吾をある本屋の店さきにたゝしめたりき。

（完）

紅葉や狩らむ

筑峰女史

秋もいつしか暮れかゝり朝な〳〵の時雨はをこちの山

の梢を薄くこく色とるたねなるべし。けふは小春ともいふべき。そらいとうらゝかに風さへなくさも彌生のこゝちせられ。何となう野べなつかしければ。紅葉狩りこそよからめと思ひたちぬ。日頃ゆきかふ親しき友がき二人り三人りをかたらひ。いそぎわり籠の用意などしつゝ家を出で離れて。道すがらさま〴〵のながめをも打すてゝ。こゝろざす彼なたの山にのみ目あてして足をはやめてたどり〳〵ゆきぬるに。これと思ふさまもなし。こはいかにしけん名におふ紅葉はいつしか。くち葉色となり。たゞ松のみどりの色のみ見ゆるこそあなうたて。けさの霜こそと頼母しくおもひしものを思ひたがひけむおろかさよたゞちに歸らんと思ひわびしも。　わり籠の手前何となうはづかし。　さはいへど。また



むしろを敷かむ力もなくあなうとゝのみかこちつゝ踏み行しあとだに。さだかならぬ道をばわけ行きゝ。さまよひありきぬ。さるほどに吹來る木枯し颯颯と音して。いづこよりか二ッ三ッ紅葉はの。誰か手向にやとあやしむばかり。風のまに〳〵舞ひいたりぬ。いまは中〳〵に力を得て。こなたかなたとおとなひつるに。むかひの山の端よりかすかにこぼれ見ゆる紅葉のつま〳〵の見えけるにうれしさにあえぎ〳〵ちかより見るに。そこらわたり。まばゆきばかり。一むら繁る紅葉はのうき秋風をよそになして。心静に錦のとばりを。たてつらねいまを盛りとなん見ゆるなりける。其の嬉しさは。とつ國のある人が名もなき國を見出せしてゝちもかくやと。手のまひあしのふみども忘れてけつ。まろびつ。まろびつ。いぬの子の雪によろこぶ風情はいと〳〵をかし。いまはたづねあぐみしくるしさをも語り合ひつゝ何のいやもなく錦のとばり綾羅のしとね

しきつらぬ落葉が上に坐をかまひ。今こそひらくわり籠の數々御酒。のまざるにゑひて。からくれなゐの。おもてにうつる夕ばえに。何れを紅葉とわき難きまで。けように入るこそいと〳〵をかしき事の限りなりけれ。たえて通ひ路もなき山陰に。かゝるめでたき紅葉の木を人はしらでありしやむなしくちりはつらんと思ひはいとゞ口惜う。あはれこの木もしこゝろあらば梅櫻の香はあらじともその赤き心根をば世のため人のために九重の都ちかき庭もにうつし植ゑば人見て心の鏡とやせん。來ん秋もまたかく染めなまし。しのべよ霜時雨散るともよし。赤きまごゝろをは。な忘れそなと。たがひにいましめて行末こし方のこと語りもつきず。友がきと物するうち。雨か。霰か。ふりかゝる音とに驚ろき。かへり見るに。まどろむ紅葉の梢と見しは。覺めてあとなき夢なりき。あなをかし。つれなさの秋の日や。はや暮れ近かくなり渡る鐘の音に。いそぎたちて。ゆふげのものまゐらばや

西洋女房氣質（下）

米國　ＡＢ子

米國婦人なるものは、アッフェル塔と共に、シカゴ大博覽會と共に、社會黨と共に、電氣鐵道蘇音機と共に、十九世紀特有の產物也。英國にもなし、佛蘭西露西亞にもなし、支那になし、我日本にさへもなし。亞米利加婦人は亞米利加固有のものにて、二ある可からざる今世紀の名物也。

美と云ふ美を集め盡し粹と云ふ粹を集め盡したる女性的巴里にさへも、亞米利加婦人の立ち入る時は、異彩燦爛として人目を聳てしむること幾何なるを知らず。左れば英吉利などにては、少し政界に頭あげたる程の人物は、好んで本國の婦人を差措き、太西洋の彼方よ

り夫人を迎ふる者多し。故チャール卿の夫人と云ひ、今の殖民事務大臣チャムバレーン夫人と云ひ、近くはマルボロウ公爵の迎しヴアンダルビルトの女と云ひ、皆然らざるなし。獨り英佛二國のみならず、獨逸の第二のモルトケとも云ふ可き陸軍總督ヴアルデルシー伯爵夫人の如き、亦亞米利加人なり。實に今日の有樣、酒はボルドウ、織物は里昂、麥酒は獨逸、鐵器は英國、侵畧は露西亞に、細君の本家は北米聯邦四十餘州に定まると云ふ勢也。

人若しあらゆる制裁を取り去りあらゆる自由を與へられし婦人の有樣は如何樣のものなる可きやと問はゞ、吾等は默して太平洋の東岸を指す可し。生れて自由の國に落ち、自由の家庭に育ち、また自由の境遇に活く。小學に行けば男女合敎にて、遊戲にかけても亞米利加孃中々男兒に負くる樣の事にてはなし。大學は全國に幾箇となく散布し、如何なる高尚の學問も腦と金の力次第なり。生活の道は千方萬方に開けて、大統領と巡査にはなられぬのみ。女にして市長に撰まるゝ所あり、新聞記者などは朝飯前の事にて、或ものは探偵となり、或ものは醫者となり、大學の敎師にもなれば、忙がしき商會の書記ともなり、各々獨立自活をなす者新約克のみにても何萬に上ると云ふ。左れば亞米利加婦人は中々女蘿の力なく〳〵男松にからむ樣にはあらで、獨立の氣象、自治の精神、財產の事、一身の世話、出所進退云ふに及ばず、大凡世の中に恐ろしと思ふ者は、上帝と貧とのみ。電氣を足にして、蒸汽の中に住み、瓦斯を食ふて生きる米國に生れし甲斐には、亞米利加婦人は大胆有爲、冒險の氣象に富みて、從てまた面皮も相應に薄からず。山高帽子に昔の股立取つたる野袴の樣なる着物着て、自轉車を走らす位のものかは、世界一週して書物を著はし、毛皮に包まれて北極の寒を冒し、銃を執て射的を試み、或は擊劍の稽古をなし、

水夫帽被りてヤツトを走らし、或は釘つきの靴はきてアルプス山の險を攀ち、馬を走らして絶所惡所を乘り越へ〱、突然にビスマアクに面會を求むる者もあれば、深夜男と挈へて人なき地をも平氣に歩し、見も知らぬ男と心易く物語りし、『ア、面白くない、今から一寸日本にでも遊びに行つて來やう』と云ふ樣に世界を見ること居間より臺所位にて、ぬらくらしたる男などは踵の下に踏殺されそうなる勢なり。左れば男女の戀と云い契約と云い結婚なども甚だ大自在にて、結婚申込などは少し才色すぐれし女は秋山の蕈狩同樣吾は幾個君は何個と競べ合ふ程なり。

スミス孃「チリーさん、此夏休の間に、あなた（結婚申込は）何個とつて？」

チリー孃「六つ半しかないの」

スミス孃「半とは何樣したの？」

チリー孃「あのそらジヨンね、彼男と一處に舟遊したがね、モウ言い出しそうになつて居たのに、生憎海があれだしたものだから、到底酔つてしまつて、其れきりになつたの。それだから、半と云ふのよ」

此は米國新聞記者が其姊妹の大氣焔を諷したるものなれども、大概其有樣を察するに足る可し。結婚前にすら斯る氣焔なれば、結婚後とても中々恐れ入つたる事多かる可きは無論なり。

（夫婦大議論良人大敗北の後三十分ばかりして、雜誌を讀み居たる夫人頭をあげ）

夫人「あなた、此雜誌に埃及では十四で王になる事が出來ても、細君は二十にならねば持つ事は出來ぬきまりだと書ひてありますが、何故でせう？」

良人「其は其筈さ、國を治むるのは細君を御するよりよッ程易ひからね」

一寸したる笑話なれども、細君の勢力は思はるゝなり。

（新婚の良人帽子とステッキを左に持ちながら五錢

銅貨を右の指にのせ）
良人「おまへ、此では片道の馬車賃よりないよ」
細君「なにを仰有るんです、あなたは此間迄はいつも往來共に歩ひて御出なさつたぢやありませんか」
金滿家の女なんど、何々公侯伯子男爵夫人と云はれたさに、歐洲の無一文貴族と結婚する者は、勢如斯くならざるを得ざる可し。

併しながら斯る氣焰萬丈の婦人のみならば、亞米利加婦人とて重寶がられる譯はなし。何處にも日向あれば蔭もあるものにて、米國にも自由の境遇に任せて、化粧、芝居、音樂、舞踏、約婚、結婚、離縁、思ふがまゝに振舞ふて人を人とも思はざる者あれば、米國西部桑港一帶の地などは隨分下等なる婦人も少なからず。結婚を係蹄にして富める男の金嚢を狙ひ、富める老人と結婚して近々の千秋萬歳の後財産を吾有にせんとする者もあり。然れども理想的亞米利加女房は斯るものにはあらず。自由の境遇に立ちて自由を利用するの大胆あると共に、自由を濫用せざるの遠慮あり。假令年少青春の時候には、野飼の駒の如くかけまはるも、一たび結婚して家と云ふものを持てば、自然に馴れて境遇に安んじ、貧しき者は氣は高くとも手は孜々として賤しき務にいそがしく、餘裕ある者は富めりと雖ども心は洗濯石鹸一つの細かきにも行き渡り、學校に學びし科學上の智識を實地の家政に應用し、良人小供の世話の側に自ら修めて進歩するを忘れず、よく家を修めて世の中にも心を注ぎ、或は小説をかき、或は新聞雜誌の寄書家となり、或は一週何時の敎師も務め、宴會にも顔を出し、時々は芝居にも行き、宴會にも臨み、夏休には田舎海濱に避暑をもなし、或時は良人と次回の大統領を豫言し、またお餐と牛肉の硬軟を論ず。家にあつても人中に出ても、活潑にして如才なく、思慮あつて經濟的に、誠に眼のさむる樣なるは米國女房の粹也。」

新約克の大通りに立つて、馬車電車の間を頬紅なる氣のきゝたるつんとすまして人を眼下に見る凜々しき娘の二人三人打連れて、風きつて行く勢を見る者は、乃至其の男を物數とも思はぬ樣にて冷嘲戲謔するを見る者は、此る女を妻にする男世界にある可きやと驚けども、奇妙なるは世の中にて、一生獨身にて渡らんなど思ひもし云ふ者すらも毎年幾千百となく結婚してそれ〴〵家を持てば、案外に女房らしき女房となり、女の時代には吾れもし結婚せば左も自由に右も勝手に振舞ふて決して今におとるまじものをと思ひし者も、何時しか化せられて果ては吾が笑ひつる事を吾れ自から繰り返へし、家のしまり女の緣先など意外に細かに世話やきたがる樣になり、一朝眼を寤せば、身は恰も吾若き時愛せし男の訪ひ來るを邪魔にしてしば〳〵注意し呉れし吾老母其者になりたるを發見するに到る。是れ然しながらまことに米國の幸なる可し。

露西亞

露西亞の婦人は槪して男子にまさる。宮中の貴き婦人より、聖彼得堡より千里も離れし田舍の田舍の貧女に到るまで、槪ね心情優にして大きく、感情强くして、辛抱强し。其秀てたるもの、或はカザリン大女帝の雄圖となり、或は靈智敎を築き起したるブラヴアツキー女史の堅忍となり、或はストツクホルム大學の數學敎授ソニア、コヴアヴレスキー女史の科學的頭腦となり、妙齡にして摧けし美術の花なるマリーパシカアトセツフの天才となれり。

現世紀中佛語の輸入と共に、佛蘭西小說の輸入と共に、閑暇なる貴族の巴里行と共に、一種の巴里風は露西亞上流社會の風に入りて、左なきだに感情的なり易き上流婦人を染め、頗る厭ふ可き敗德の風を釀し、大小說家トルストヒ伯を促して「アンナ、カレンナ」を書き「クレエツロウア、ソナタ」を書かしめたれども、泥に

塗れても花は猶餘香をとゞむる如く、墮ちたる婦人の中にすらも墮落に入らしむるに忍びざる者少からず。敎育ありて時事に慨し爆烈彈の熱きも投ずるを辭せざれば西比利亞の氷雪の冷たきを物のかずともせざる虚無黨の女などには、凛々たる氣象と共に、妻として母として主義に似げなき優しき美德の女もあり。

左れど露國の女房氣質は、寧ろ田舎に行きて見るこそよけれ。露國の百姓約八千萬。概ね貧ふして、家中にはあら木の壁にテーブル一つ椅子一つよりなく、蒲團なければ身に纏ふたる外套を敷きて着て寢る位にて、一年に三四ヶ月は明日の食に困り、産婦の枕には紙屑か綿あれば贅澤と云ふ憐れむ可き家にありながら、出ては農事の將となり、入ては家事の相となり、大勢の子供を育てゝ夫を助け、限りなき氣苦勞身苦勞して、其運命を忍んで然も怨みず、朝々消へかゝりたる壁上の聖像を拜して一生犧牲となりて世を渡る、幾百萬の百姓女房の身の上こそ、憐れにも亦悲む可けれ。

（完）

◎蘭、竹、蘇鐵の盆栽　本月上旬より開花するものは寒風、寒蘭、萬歳蘭等にして最も溫栽なる場所に置きて觀賞すべし、竹、蘇鐵ヿ室内より取出して觀賞するものは成るべく溫暖なる場所を限り、寒冷にさらすは惡し

談叢

初太郎の漂流譚（四）

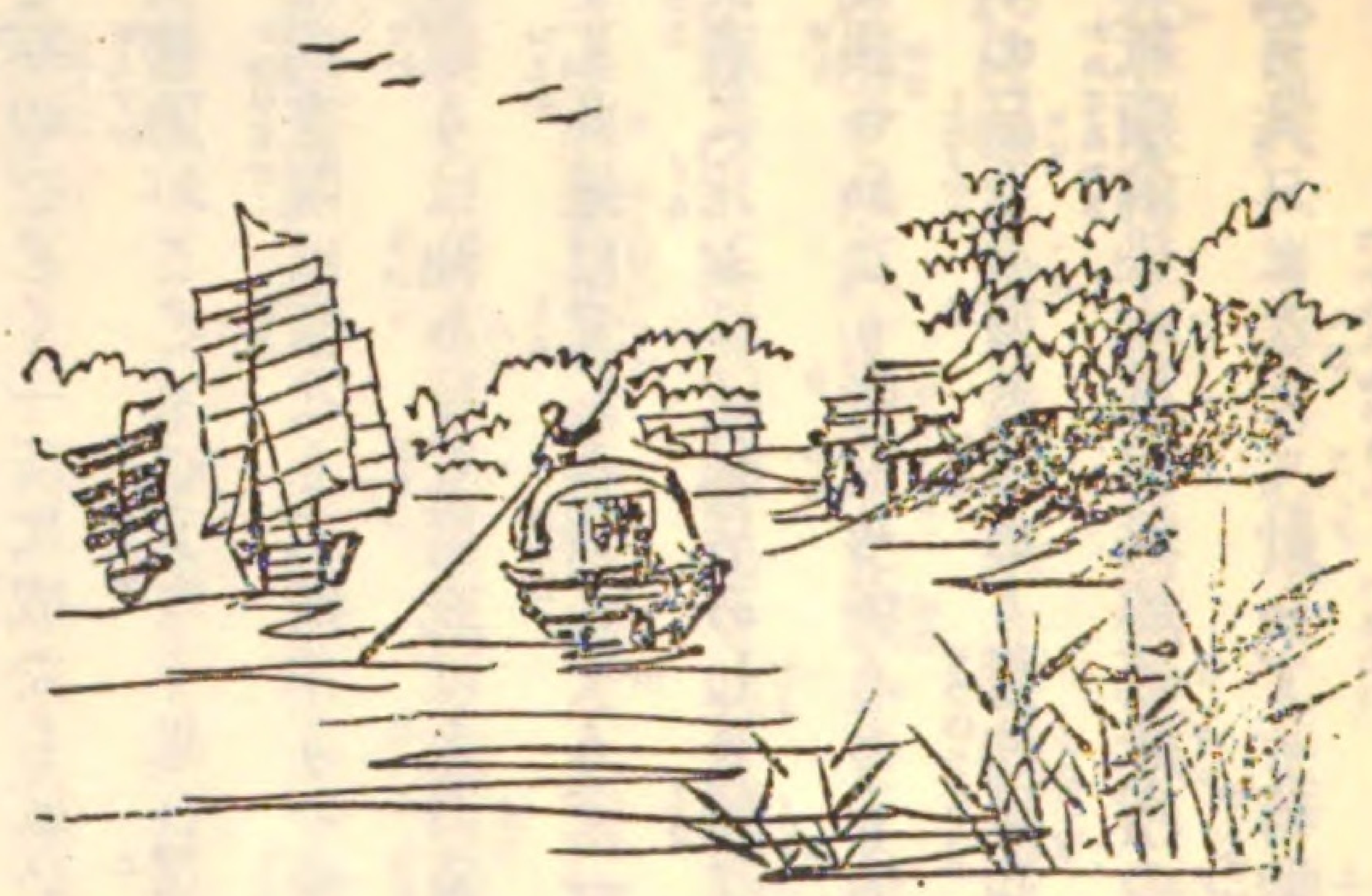
比は正月中旬の事なりけり着船より三日目に初太郎一人陸へ上れといふ故善助と一ヶ所に上りたき由共々に賴みけれど承引せずこれによつて持來し銀錢六十枚ツヽをわけて善助に別れける夫より端船にて陸へ上り少し行けば唐人數多參り來りて色〳〵と尋る躰なれども言語通ぜざれば砂の上へ我日本人と書て見せければ點

頭てある所に伴ひ往けり唐人の躰は皆頭のまはりを剃て頂の髪ばかり丸く殘し三ッ打にして後ろへたれたり衣類も今長崎へ渡來の唐人とかはることなし此地人家凡一萬軒ばかり商家軒を並ぶされども町幅は至て狹し伴ひ往かれし家は大家にして長さ二十間ばかり奥行も同じ程にして下は敷瓦二階は板張なり屋根にも赤き瓦を葺きたり家主はアメリカの人なるよしなれど阿蘭陀人の風なり惣じて此地の人物七分は唐人三分は外國人入こみたり外國の商船三十餘艘も碇をおろして繋ぎたり天竺呂宋英吉利を始め諸國の人々徘徊す天竺の人は面躰唐人にかはらず頂に髪を少し殘し餘は殘らず剃て長き頭巾をかぶり居る丈け高く身肥たり呂宋の人も同樣なれ共天窓のかぶりものは蘭人に似たり其餘西洋人は大抵一樣なり又此家に去る辛丑十月に漂流したる加賀領能登の國鳳至郡水月村の者惣七彌三兵衞といふ二人又十ヶ年計以前に漂流したる肥後の國川尻のもの庄藏壽三郎熊太郎と云三人皆一所に居たり漂流の始末より今に至るまでの次第を具に物語ければいとゞ哀れにおもひける斯く初太郎は正月中旬より此家にて右の人々等と同居し食事は所持の銀錢を出し米魚肉の類を調のへ自ら日本風にこしらへて食し頭も髪も日本風になしたり始は月代をせし時はことに嬉しかりしも最早此處にては暦もあることなれば月日をも委しく知りたり其逗留中に肥後の者に誘はれ所々見物せしに社と思しきは一向に無く佛閣はあまたあり何れも日本の黄檗宗の寺院に似たり劇場もありて見物せしが本より何ともわけは分らざりしも定芝居にてはなく所々へ廻り來るを雇てさせることゆえ木口などいふこともなく誰にても見次第なり男女の姿は長崎にて商ふ繪圖に少しもかはる事なし女子は足の小さきをよしとする由にて幼きより絹にて足を纒ひ大きくならぬ樣にする故大人の足にても七八歳の小兒のごとく歩行ふり腰をかゞめてこ

との外見ぐるしきなり正月中旬より四月十日まで凡九十日ばかり澳門に逗留せり

四月比になりて此所より台浦へ便船ありとの事にて右能登の者二人初太郎と同じく其船に乘り四月十日に出帆す此時肥後の者のいふには近年唐土と西洋と戰ひのありし跡なればアメリカにて貰ひし衣服銀錢の類所持して行かば西洋の間者と疑るべし此所に殘し置て然るべしといふにより其詞に從ひことごとく肥後の者に與へけり惣て漂流人を外國より送り來るに廣東の部下に着すれば官命ありて陸地を護送す廣東より江西へ越へ鄱陽を渡り浙江にいたるなり若澳門へ着し時は寧波にても福洲にても便宜次第船にて送ると定法なりとは此便船したる船は乘組十人にて諸事長崎にて見る舟に同じけれども地まはり故小さきなり湊を出て東へ向て乘行こと十八九日にして福州の內厦門の澳の島に舟かゝりす是迄行程三百里餘厦門は繁昌の地ときけど此島には人家只壹軒あり日本にていはゞ番所ともいふべき躰なり爰に滯船すること五六日五月上旬厦門より東北の方へ向て乘ゆき三百里も來つらんと思ふ所にて舟を繋ぐ此所をチンモウといふ地勢東うけの灣洞にして双方の山の崎に人家百軒程づゝあり皆漁をもつて業とするさまなり唐土の海邊都て片灘にして山岸の所もあり又砂濱もあり山岳も遠く見ゆれども彼國人等一圓山島の名を敎へず又磁石などもみせず陸近き所は多分濁りたる海にて淺し只福州の海邊のみ澄たる所あるなり五月下旬になりてチンモウ土船六月十日ミンポウといふ所へつく按にニンポウなるべし即ち寧波のことなり此間も三百里もありしならん澳門よりミンポウ迄凡九百里計と覺ゆ此所廣き所なれど町幅は狹し日本の大坂のごとく縱橫に堀を通し運送至て自由なりと見へたり則上陸して役人躰と覺しき家に十日ばかり逗留す是より台浦へ海を渡れば僅に五十里程なりしかれども川舟にて送ること定りなるよし同

廿日寧波出立川舟に初太郎能登の人二人船頭水主都合八人乗組別に警固の船に役人も乗たり所々にて附届け案内する躰に見ゆ船の躰細く家根あり川筋は狭き堀川



にして左右に堤あり川幅五六百又は四五間の所もあり水は溜りたる様にて動くこと少し左右は田畠連りて米穀よく熟せし躰なり風よろしき時も帆をかけ風あしき時は岸へあがりて引き行し左右とも甚廣く近く見ゆる山もなし同廿六日ホンチウといふ所につく（ハンチウなるべし即ち杭州なり）此所の役人受とりてミンポウの役人はかへりけり閏七月（卯年唐土にては七月に閏月ありし也）九日迄逗留す此所人家

大阪ほども有て町の様子奇麗なりされども市中往來の節はいづれも駕籠に乗る故に市店の飾り様など委しくも見知らず（駕籠は左右後の三板にてはり左右に窓あり簾をかけたり前を明て乗り下りする前にも簾あり厚くして委しく外みす）へ出行ときも見物人何方にても多し同十日又川舟に乗り送らるゝこと前に同じ台浦迄の内二ヶ所にて改を受たれども其地名は知こと能はず同十二日台浦に着すミンポウよりは二百里もありしと覺ゆ船より上り直に駕籠に乗りて役人の家に行き則駕籠より下りて案内して一時ばかり待居て役人出來れり中にも重役の人と見へ小高き中央にと曲彔にかゝり紋繻子の裝束を着し玉の飾ある笠を戴きたり左右に下官十人ばかり並びて立たり通詞唐人出で漂流の始末年月一ト通りを尋れば則其次第を演説す事終りて通詞付添ひ明家のごとき所へ連行ける此家に奥羽の漂流人六人居たり是も丑の十月に吹流され辛苦を嘗て漸此處へいたりしとなん伊達郡半田村十吉なる者の船のよし仙臺領の者三人（石の巻石濵氣仙三ヶ所）

の者なり出羽最上の者二人南部領の者一人初太郎等合せて以上九人となる是より一同になりて日本へ渡る事なればいまは心強く思ひける去ながら長太郎を始め七人の者と斯のごとく一所に成たらばいかばかりか嬉しからむ又善助がことも心元なく思ひ居たり此所にての食事朝は粥晝晩は飯なり二番作りの米なるよし至て下米なり菜廻りは油あげ豆腐或は太刀魚大根の類を煮たきを食す凡此地は宜しき湊にて人家一萬軒斗されども日本の兵庫に比ぶれば家居あしき樣なり諸人群集する事は極て賑やかなり寺院も多くあり店屋さま〴〵ある中も日本の品々を賣る店あり醤油昆布など價殊更懸隔なり其外紙類傘染木綿索麪煙草味噌の類迄日本の物多くあり九月八日になりて計らずも善助來れり樣子いかにと尋ねれば二月中旬澳門へ着夫より臨みの海路を經て舟山といふ所に着しける漸く此所にいたる由を述て初太郎に別れて格別の艱難はなかりしかど一人に成し故心細かりしと有ければ各無事を賀して共に悦ひけり台浦に留る事凡百二十日其間五日に一度づゝ浴す又町内歩行の節は必役人付添て徘徊す故に思ふ樣に見物すると能はず扨十一月十六日に奥羽の者五人甚助長次郎喜兵衛重吉文藏を源寳といふ船に乘せて出帆す同廿三日に初太郎善助次郎兵衛出羽彌三兵衛能登以上四人を永泰といふ船に乘せて出帆す惣七は台浦にて病死せり台浦逗留中に籠壹つ木綿蒲團一つ同綿入一枚羿跂一ッ外に品々の物を此程より世話いたし呉し唐人より贈るよし通詞申聞されしゆへ則貰ひ受て持歸りたり扨唐土の人に暇を告げ纜を解て台浦の湊を出る此船乘組人數九十五人初太郎などは舳の方の綱など置く所に居て甚不自由なりしとなり湊を出てより島などを見て名を尋れども前の船と同じく其方



共が聞しとて不用なりとて少しも敎へず磁石等も一向に窺はせず是船頭よりの言付なるよしなり廿三日出帆して同晦日方夜半まで走りけるが五島の山に火も焚を見て天へも登る心地せしなり翌十二月朔日朝には早山近くなれり惣して唐船渡來の節五島の山みゆる所に至れば鷄を殺し酒を祭りて祝儀をなす歸國する節も唐土の山をみれば同所に祝ひをなすとぞ此時も船中大に祝ひ喜びて四人の者にも共に酒殽を與へしとなり十二月三日肥前長崎の湊に恙なく入津す頓て御奉行所の御受取となりて揚り屋へ入りぬ翌四日に源寶船も入津して彼五人の者も一所になりたり三日目に立山御奉行所の白砂に於て始の漂流より外國におりたる次第御尋あり則亞墨利加より唐土へ渡り澳門より寧波杭州を經台浦にいたり唐船に乗り當湊へ歸りし趣具に言上し踏繪といふことも濟たり（長崎の御役所に繪板といひて外道佛の像を銅に鑄たるものあり外國に往しものは邪宗門に入たることなきとの證據に此繪板を踏まするなり）其後も再三微細に御尋あり籠居の間御賄ひは朝は汁に香の物晝は魚類の煮付晩は茶漬なり折〳〵御役人來りて願の事もあらば遠慮なく申上べし神參拝も調ふべしと懇に申聞これより月に三度ヅヽ湯に浴し月代は調はず鋏にてはさみ居たり四月下旬にいたり申談して衣服の願をせしに六月八日に各單物一枚帶一筋ヅヽを下さる去冬着船の節早速に帶一すじ手拭一ツ傘下駄を銘々に下されたり各官府の御惠に浴し數年の憂苦も頓と忘れしがのみならず不日にして舊里に歸り父母の顔を見るならばいか斗嬉しからんと樂しみ居たりけり既に今辰の年に移り春過ぎ夏たち秋七月廿五日に至り番の者の云樣各の内何方かは知らねども御役人迎に來られしと有ける故初太郎思ふ樣爰に一所に居るもの皆遠國の人なり善助と我と兩人は第一に近ければ定て我〳〵が迎ひならむと心の内に樂しみ居たり廿八日に一同御奉行所へ出たる時阿州より迎に參り

し由を仰聞られ八月五日御引渡に相成同廿一日故郷に歸り着しなり　（終）

辛抱力

楓葉

合衆國のハアパア會社と云へば、全世界に於て一と云つて二と下らざる大出版會社にて、此處より年々出版する書籍雜誌の數は、之を横にならべて世界を幾週するに足る程盛大のものなるが、其原を質せば實に個人の辛抱勤勉によつて築き起せしピラミッドなり。

頃は西暦千八百十年の事なりけり、ゼームス、ハアパアと云ふ田舍者活版屋にならんとて故郷ロング島を立つて新約克に赴きける。兩親共に熱心なるメソヂスト宗派のものにて、別けて母は田舍者に珍らしき女なりけるが、別に臨みて其子を抱き、決して上帝を忘るゝな、また御身の脉管には誠直なる血の流れ居ることを忘るゝな、と呉々も誡めけり。

偖ゼームスは新約克に行きて、或活版所に入り込みしが、新參者殊には田舍者の事とて、ありとあらゆる苦しき汚き仕事は、あれもこれもと片端よりゼームスの肩にかゝりき。其頃活版所のあたりは、上流門閥の富貴仲間の住居多く、若旦那若紳士など呼ばるゝ似而非風流男共は、ゼームスが品も仕立も粗末千萬なる着物着て日々仕事に精出すを見て嘲り笑ひ、ゼームスの姿見ゆる毎に、通りの向ふより『ヤイ、貴樣の衣裳は巴里から取寄せたのか、貴樣の裁縫師に紹介して呉れ』『ゼームス、貴樣の衣裳は一ヤアド何程だ』など叫び、果ては失敬にも近寄り來りて、ゼームスが衣裳を撫でほめる眞似



して、イヤと云ふ程つめる事もありける。少年ゼームスは無念に堪へざりしが、グット堪て辛抱し居たり。或日ゼームスは例の通り働き居たるに、似而非風流紳士の一人つか〳〵寄り來りて、君の裁縫屋に行て見たひから名刺を呉れと云ふ。ゼームス肩にしたる桶を御して、した〻かに其男を蹴り『これが名刺だ。大事にしろッ。乃公が年季あひて商賣でも始めたら、貴様の樣な奴あ仕事がなくて困ることがあるに違ねエから、其時や乃公の所へ來い。使つて呉れる』と罵つたり。不思議なるは世の中なり。此事のありし四十一年後、ハアパア會社の名米國に轟き、活版屋の下はたらきゼームス新約克屈指の豪富となりし時、蹴られし彼男落魄してゼームスの許に來り、四十一年前賜はつたる『名刺』唯今持參致したれば何卒使ひ玉はれと哀求したりとぞ。

偖ゼームスは忠實に年季を務め終りしかば、主人喜んで左も鷹揚に此上は何處に行つても仕事にありつかぬ事はあらじと云ひけるに、ゼームスは今後は自身にて仕事を始むる積に候、其仕事も最早約束致して候、唯此上望ましきは、貴所より此ゼームスと云ふ男は書籍出版をさせても大丈夫と云ふ保證狀を戴き度のみにて候とて、主人を驚かしけり。斯くてゼームスは弟のジヨンと共に、小さき一室を借りうけて活版業をはじめ、最初は『セチカの道德論』二千部を刷り、次は祈禱本をステロ版にすることを請負ひしが、其頃はステロの業未だ發達せず、人手にかけては入出を償はざる程の費用を要せしかば、ハアパア兄弟は自からステロを習ひ、百方苦心の末終に仕事にかゝりしに、結果は新約克第一の手際との評判なりし。是よりハアパア會社は勤勉なり、正直なり、信用す可しとの評判頓に立ちて、六年の間に新約克屈指の大活版所となりたり。

ゼームス兄弟は非常の勤儉にて、初十年が間は殆んど

暖かき飯食ひたることなく、而して雇人を待つには到て厚く、恩惠規律並び行ひしかば、今日に到るまで、ハアパア會社にては、子供の時より雇はれて大人となりはては老人となるまで會社を去らぬ者多しと云ふ。

鷲と小兒

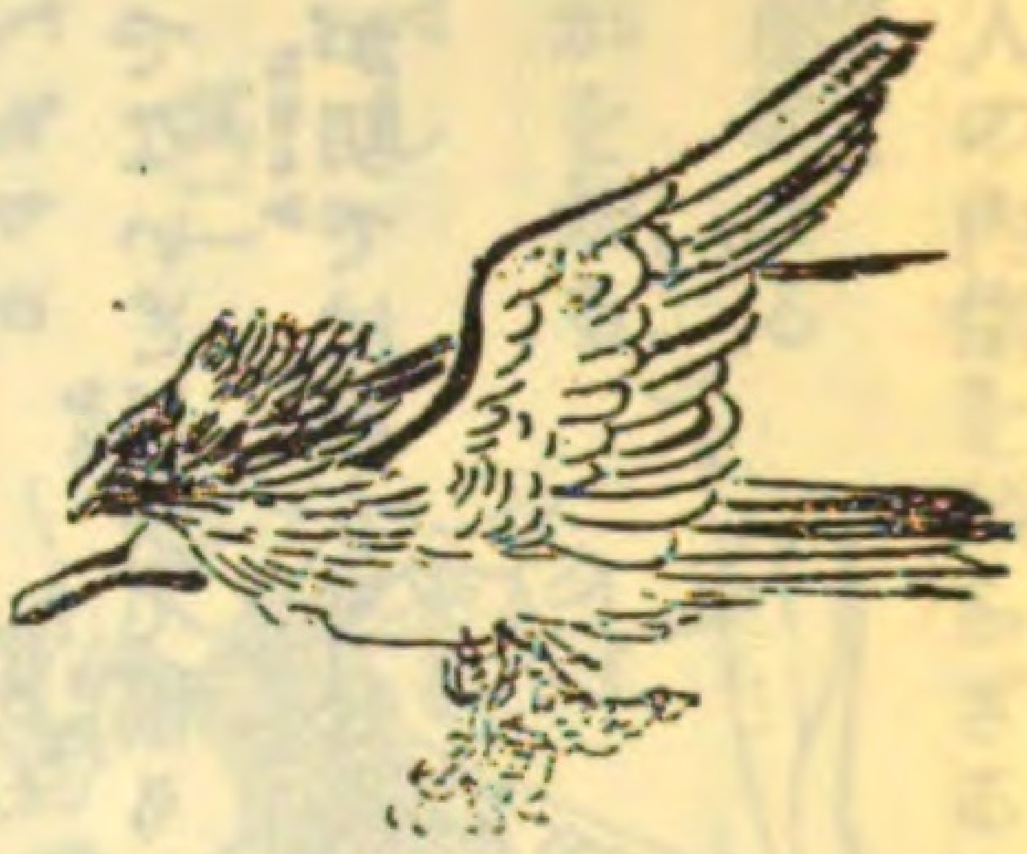
少年諸君、少女諸君、諸君は必らず兩親を有せらるゝでありませう、諸君が無事に成長し智惠もつきて一人前とならるゝは、これ親の恩愛の爲す所であります、親の恩は山海の如しと申しますが、どの位ゐ恩愛が深いか到底言葉では述べ盡されません、記者が信州飯田で聞き取りました鷲と小兒の話をこれから致しませう

信州は山國であることは皆樣御存知でありませう、然り信州は先づ第一と指を屈する山國であります、山國でありますと恐るべき獸も澤山居ますが、鷲も亦恐怖すべき動物であります

深山の大鷲が人家のある所へ出でゝ害をなした奇談は信州には珍らしくありません、或年飯田に近き村落の少年等は程近き山中に遊びに行き、高き木の上の鷲の巣より落ちこぼれしまだ羽立の出來ない雛鷲一つを持つて家に歸り、其夜は甲太郎の家に其幼鳥を止め置き、蝗や蛙のやうな生物を捕へて食物とし、大勢の小兒等が寄つてたかつて可愛がりました



其夜が明けて甲太郎の家の誰彼は農事に出懸んとし、甲太郎は毎朝よりも早く起き出でゝ、雛鷲の傍を去らないで居ますと、忽然、剽然凄じい物音して窓の竹格子を散々に押し破り、座敷の中に闖入し矢庭に甲太郎を驅散



らし、雛鷲を片手にあつかひ元の窓より抜け出でたは恐しい程の大鷲でした、甲太郎は呆氣に取られて見ますと、例の大鷲は、其時丁度門邊に遊び居る玆歳三つ歳になる妹を片手で引掴み、大空に舞ひ上りました

此有様を見て甲太郎の家内のもの皆々驚き、兩親は狂氣のやうになりて アレヨ〳〵と鷲の行く後を追ひかけました、野となく小川となく空を眺め〳〵て大鷲をつけて行きましたが、一里程もあるといふ所の斷崖絶壁の角に、龍の上天するやうな勢を見せて居る老松がニユッと聳えて居ます



大鷲は老松の頂上に息を休め、掴みし少女を枝の上に載せて其顔を打眺め、鋭き嘴もて少女の眼鼻をほぢりて餌とし舌を鼓つやうに見えます、老松の根方から兩親や從いて來た作男どもは手に汗を握りて上の樣子を凝視て、悲しき顔色を顯はすも道理、若し墮落すれば少女は粉微塵となるまでもなく、今大鷲の爲め無慘の最期を遂げつゝある、

母は泣き伏し、父は頭を垂れてある間に、大鷲は再び少女を提げて急に元來し空を引返し、非常の速力にて飛び翔り、やがて其姿は見えずなりました

兩親や連のものはもうこれまでと念佛など唱へながら自家に歸ると、其門邊に鷲に摑まれし少女は兩親を尋ね泣いて居ります、母は矢庭に少女に飛びかゝつて身躰を見ますれど、別に是れといふ負傷もありませなんだ

此話を聞く人は慘酷で通り者の鷲ですら我子を思ひ、我子のために仇を取り、また人の子は餌とする程の罪でないと思つて傷もつけず無事に返した情合もある所が明ではありませんか

世界戰爭畫報

其一　アルブエツテの戰爭

（一八一一年五月十六日）

千八百十一年五月佛軍（則ちナポレチン軍）はソールトを元帥として同盟軍の元帥ベレフオルドに圍まれけるスペイン國バダジヨツズ府の守兵を救援せんとシヴーレーより進軍せり、ベレフオルドは佛軍の救援するを聞き、英、葡、西の同盟軍を率ひ、バダジヨツズ府より數英里を隔つるアルブエツテの村落に邀へ撃ちぬ、戰爭は始まれり、佛軍の騎兵は慓悍精英を以て三軍に鳴り、ブレーキが率ゆるスペインの軍は四度路になりてなだれかゝり、一時は同盟軍も危殆の有樣にして兩軍の殺傷相當りしが、終に勝利は同盟軍に歸し、佛軍はシヴーレーに退却せり、此役英軍のみにて一萬八千

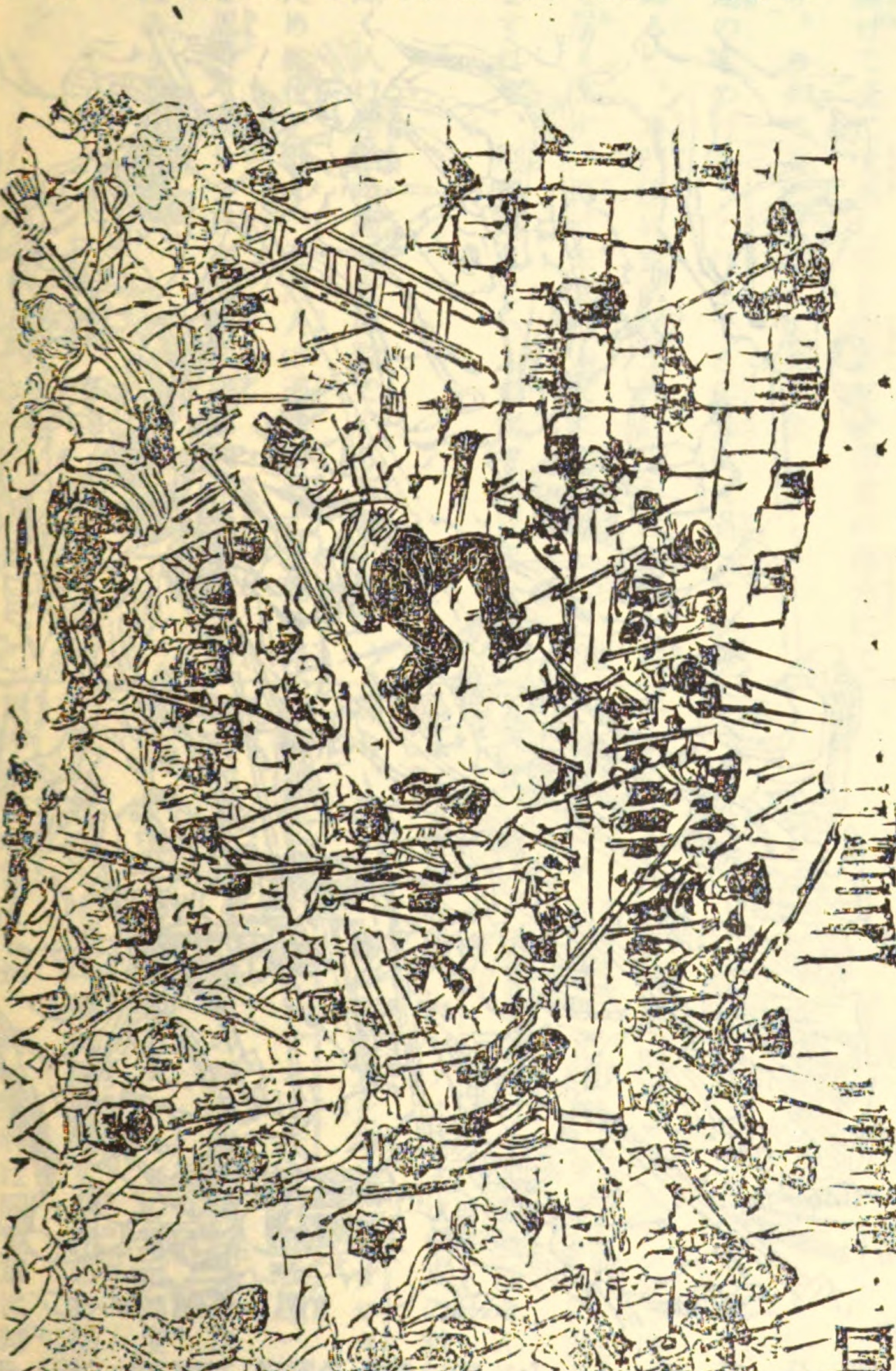
人の内傷を崇らざるもの千五百人なりしと、如何に大激戰なるかを知るべし

其二　ペダヨツズ府の攻撃（一八一二年四月六日）ロールド、ウエリントンの率ひし英軍は千八百十二年一月よりがアチアナの土堤により



てペダヨツズ府を圍めり、佛将フィリッポン城兵五千を以て能く防戰す、同年四月六日英軍の巨砲は已に數箇所の敵の壁壘を破砕し、其夜十時を以て四隊に分れて襲撃を試みたり、然れども城兵能く戰ひ、始め英軍卿退せられし

と雖も、西北の方面支ふること能はず、英軍勢よく突進せり、守兵殊死して防戰せしも、城遂に陷りぬ、英軍此一夜にして即死せしもの三千五百人、鮮血に渴く勝利軍は城に入りて敗軍の敵を殺戮すること二晝夜間なりしといふ



⊙大坂漬　大根の根も莖も葉もこまかに刻み鹽をふりかけて手にて揉み桶につけて重石をかけ水あがれば出し醤油をかけて食す、蕪もよし、此頃の經濟的の漬物なり

家　政

日用雜事　K、K、

味噌醤油の防腐法

味噌醤油等を永く保存するには最初桶の内面を硫黄の烟にて燻しおくときは、味變る事なし。又桶の底の下にて硫黄をもやしてもよろし。

味噌既にすい味つきたらば、立貝の殼を桶の口一ばいにしきならべ、立貝やわらかくなる迄おくべし。すい味をとる事妙なり。

かすていら製法

卵十五個をよく鉢の中にてかきまぜ、砂糖壹斤小麥の粉壹升とを入れて、能くすりまぜ、鍋にクルミの油をひき、其上に美濃紙壹枚しき、ふたの上にも火をのせぬる火にて燒くなり。

羊羹の製法

小豆（白羊羹ならば白小豆）一升をよく煮てすり鉢にてすり、漉してよくしぼりおき、扨砂糖一斤半に水二合をいれて煮たて、漉して前の小豆と葛を盃三杯程混じすり合せ蒸籠にて蒸す。

朝鮮飴の製法

餅米の粉一升に水飴七斤、白砂糖六斤の割合にてぬる火にてよくねりまぜ、透明に、少し凝まりたるところにて、平たき箱の内面に豫め片栗か温飩粉をしきおきて、うつし冷やしをくべし。かたまりたるところにて勝手に切り用ゆ。

しみぬき

衣服又は足袋などに泥のつきたるとき、洗つても〳〵落ちぬことあり、これ都會にては、車輪の油とか鐵な

ど土に混ずればなり。其時はしみの處に卵の黄味をつけてもみ、後清水にて洗へば見事に落つ。

油のつきたるは、揮發油に海綿を浸して洗ふべし。

錆のしみはオクザツクカーシードとて（藥店にて求むべし）白粉を、しみを少しぬらしたる上につけ、指にてよくこすり、後清水に注ぐべし。若し古きしみならば、硫化ポツタース液又はソーダを注ぐ。少し青白くなりたる時鹽酸二三滴に水八倍位の割合にて洗ひ、後清水にて注ぐ。

ペンキは油類と同樣の仕方にておちるなり。

汗の水にて落ちざるときは、アンモニアにて洗ふべし。もし古きしみならばオクザツクカーシードをつくれば容易に落つ。煤のつきたる時は、其部分をつまみて揮發油にひたし、海綿にて輕くこすり、揮發油に卵の黄味を混じたる液に海綿をひたして幾度か其しみにぬり温むれば可なり。又鹽酸と水との極薄き混水にて洗ふもよし。

インクは速かにシヤボンにて洗ひ、水にてよく注ぐべし。もししみのこらば、硫酸又は鹽酸十五に水一の割合の混水にて洗ふべし。橙、柚子、蜜柑等果物の汁のつきたるときは、弱硫酸を一合の水に十滴或は十二三滴の割合に混じ、小さきしみならば指につけてこすり、絹物の如きは、海綿に浸して摩り、後清水にてよくそゝぐべし。

水にて洗ひて却て水のしみ出來ることあり、これ水のつきたる所だけ糊おちたれば際立ちたるにて、全躰の糊を落せば可なり。されど少しのしみなれば平なる所にひろげ、四隅をピンの如きものにてとめ、水にてひたし、西洋紙をあて、ひのしにて乾かすべし。

小兒の六小便のしみは、大抵水にて落ちれども、臭ひ殘る事あり、然るときはアンモニアにて洗ふべし。もし古きしみならば、オクザツクカーシードにて洗ふべ

し。
右は丁寧なる仕方なれども、更に簡便の方を云へば、餅のつきたるときには、大根の汁をつけて洗へば、落ちる事極めて妙なり。
酒の袖などにこぼれたるとき、直ちに煙草の煙を幾度も吹きかくれば、色も褪めず、あとものこらざるなり。もししみの久しくなりたるものは、大豆の煮汁に半日程ひたし、後清水に注ぐべし。
油つきたる時は、大根のしぼり汁を塗り、熱湯にて洗ふべし。澁のつきたる時は、砂糖をすりこみて、後水にて洗ふべし。
煙草のやにのつきたる時は、生味噌を水にとかしたる汁にて洗ひ、後水に注ぐべし。
襟垢の古からざるものは、軟かなる餅にてこすれば、見事にとれるなり。

長座

二合半士



來客の中に、最も主人と家族に迷惑をかくるは、長座の習慣ある客なり、既に用事は終へても、中々去る景色なくつまらぬ談話を、永々と打話し、おかしからぬに、高々と哄笑し、人の家の座蒲團に、一日を費消する人あるには、閉口なり、特に予の如く、農工の業に、從事する家庭にありては、主人の用務、家族の職業を妨げられ、其上に、貴重の時間を空消せしめらるゝは、實に不愉快極まることにて、長座先生こそ、誠に恐るべき、大敵と言ふべけれ、東京にては、加様の客を、早く歸らす呪なりとて、客より見へざる所に、箒を逆しまに立て、手拭もて頰かむりをなさしめ、或は客の下駄に、灸をすへる

ことあり、此兒戯に類すと雖も、厭悪困却、主人の退屈、家族の迷惑が、爰に至らしむると思へば、氣の毒千萬と申すべし、凡そ人の家を訪ふ目的は、用事を果すにあり、用事だに果さば、直ちに去て、他の用を探すがよし、便々と、一家に長座空談して、徒らに怨言を買ふは、交際法に於ても、拙中の拙なるべし、記して、長座の癖ある人の、三省を促すものなり、

强情の兒の話

紫　樓　生

世間には生れつき甚だ强情の兒がありますが、これは家庭の教育によりまして隨分すぐれた人物になす事が難くはありません決して父たり母たるものがかゝる兒の教育を忽にしてはなりませぬ、私はこゝに一人の青年の歴史を皆様に御紹介致します、此の人は兄弟も澤山あり、豊かの家に生れましたが兄さんや姉さんとは大に性質がかはつて居て誠に珍らしき强情の兒で守をするものが少からぬ苦勞をしましたが殊に母人は養育に心身をくだかれ是非とも此の兒を人らしくしたいと日夜注意に注意を加へられました。此兒は初めは善く母親の聲を聞き分け善く母親になつきしも追々生長するに伴ふて他の人を嫌ふだけ母親に强情をはりだしまして乳を飲まして貰ふ時間が少し後れますとそれから泣き出しまして他の人が來て樣々に申してもちつとも聞き入れるけしきはなく漸く母様が來たられて抱き上げ乳を飲ましだまそうとしますと此時は母様も乳も此の兒の强情にはかなひません足をどたばたして出來るだけの聲を上げてなき遂にはたれも手を出さず口もきゝませんと泣き疲かれて眠つてしまう事が度々ありました此のくせが暫く止みませずして三歳頃迄折々おこして或る時は泣きつゝ七轉八倒して土間で眠つた事が

ありました。四歳になつた時に祖父さんの墓詣りがあり澤山お客もあり午後四時頃一同列をつくつてお詣をする時此兒の蝙蝠傘が無と云ふので、墓詣はせぬと强情をはり家より二三町なる或る家の板塀に握りつきて動きません暫くして他の人のを貸してやりましても聞き入れません遂に此塀の板を一枚引き放しましたが墓詣はせず夜おそく迄其儘にして居つた事があります。かゝる例は五六歳の頃には澤山で其後小學校へ昇りましてからは强情だけに善く勉强し先づ品行もよく他の生徒の摸範となる位でした、或る日ふとした事より友達と爭をして强情をはりまして教師を閉口さした事があります、此時實際は他の生徒が惡るかつたから少しも此兒は詫もせず先生の言ふ事に抵抗しましたから先生は威しまして今日は家には歸さず明朝迄書物を讀まして置くと言ふて事務室の片隅に低机を据て本を渡しますと平氣で聲調子も普通に少しも倦まず七時頃迄讀みつゞけました、實は先生は兒が詫るを待つて居つたのですが此の有樣には困入り先生が漸々に詫をのべて歸つて貰ふ事になりました、それより後は强情者の綽名を得て教師も敬して遠ける樣にしました、併し此兒は自分では少しも强情だとは思ひませぬ故母樣はたいそう苦心して戒しめられましたが此兒は强情の位ですから極めて正直で又凡ての事に當て專心に從事します故に高等小學校を卒業する頃は强情の性質が次第に善き方面に發達しまして猥りに强情ばる事はありませんでした併し時々は二月位は魚を喰はぬと言ふて押通し味噌汁は吸はぬと言ふて一向平氣で押通しなどする如きつまらぬ强情をはつた事があります、此兒は今日は丁年になつて或る事業に從事して居りますが極めて正直で忍耐力に富み責任を重んずる前途多望の青年であります當人も深く自分の短所を戒めて時々友達に懺悔致します、よく今日の自分あるのは其母親の教育だと

申しますが實に其母親の教育は此青年を完全に致したものでありましよう。

兩親と子供間の愛（下）

しばのや

一、汝が設けたる小供を愛するの情ほど貴重なるものはあらじ

二、とは云へ尚ほ一層に神聖に且尊崇すべきは汝がなき父、或はなき母、の代理を爲しつゝある養ひ子を愛するの情なり

三、如何なる野蠻人も其子を愛すれども眞に父たり母たるの義を盡せば汝が思想の高尚汝の心情の優美を證す

四、汝が如何に汝の子に對すべきやは已に自然の教ゆるありて汝は深く心中に刻して義務は那邊に存するやを知了せしむ

五、然し汝が神壇の前にて夫人と共に養ひ子を得し時既に大ならざる小ならざる義務を受得し生者及死者に對する義務を有す

六、汝の養ひ子繼子に對しては汝の死後亦他の人が汝の實子に對して爲し呉れよかしと思ふ通りに爲せ養ひ親繼母の名は汝の家汝の家族に於て尊敬すべき名と爲せ

七、汝の行爲を地下にても能く詠め居りて神の前に詣りて汝が訴へられぬ樣にせよ

八、汝の實子を愛する汝の養ひ子繼子の如くせよ

九、餘りに愛し過ぐれば幾分か薄く愛さるゝ者の猜忌を買ふに至るものにて必竟汝は愛の畑地に地獄の種子を撒きたるものぞ

十、汝が愛に過ぎたるが爲めに幾分か薄く愛せられたる者をして罪なきに涙を流さしめつる幾回ぞ

十一、之に反し汝より能く養育せられたる子供が成長し其心中に厚き深き言ふべからざるの恩を感愛する時は初めて感謝の念を生ずるに至り之に酬ゐんとするの情を勃興す

内職案内

◎足袋の事　此頃は足袋の内職は非常に忙しき由、注文足袋と云ふ店小賣の上等品は、付廻し十足に付十錢、甲立十足に付七錢

扨付廻しと云ふは底と甲とを合はせる仕事にてツマ縫(指先の所)は多く男の仕事(十足六錢)その外の所(十足四錢)は大概女の手にかゝる也、達者になれば二十五六足は出來る

甲立といふは問屋で斷放したるを縫合はせる仕事なり、是は先づ女の仕事なるべく達者になれば十五六足は出來る、

田舍向の仕入足袋は、付廻し十足六錢、甲立十足四錢五厘、小分をすれば、ツマ四錢、餘は二錢、三十足內外は誰しも出來べし

別に三軒町足袋といふがあり、淺草三軒町の專賣とも云ふべきものなり、是は巡査兵士の古服にて作る也、」

注文足袋は極々素人には少し出來にくし、此の故に大抵毎年同じ人がする事になり居れど今年は人の足らずして困り居るといふ

仕入足袋は素人にも譯なく出來る事故、何所でもの孃さん御新造さん達に便利なるべしツマリ針仕事なれば內職めかずして好かるべし、

三軒屋足袋は極々下等品なれば仕事としての品も善からず、此の職をする人は多く裏長家の女房達にあるべし、是も今年は非常に人不足の由

◎股引ぬい　問屋は斷ちはなしたまゝの物を內職人に

渡す、それを縫ひ上げるが內職人の仕事なり、針のきく女房さんには一日三足は六かしき事にはあらず、此職は上手になれば問屋から大事にしられて好い職なりと云ふ、一足につき四錢內外の手間賃なり、

●足袋のコハゼを掛ける糸を付ける事　是も至極好い職なるべし、馴れて來れば五六十足やすい事なり、十足につき二錢、但し糸代二錢ぐらゐ自分持の事

●毛糸手袋の指付　是は手奇麗な仕事なれば官員方の御內證などに尤も向き物なるべし、問屋から甲と指との離れ〳〵になつたのを持つて來て其れを毛糸で編みつける仕事なり、一日に十五以上出來るといふ、十について六錢の賃錢、取次所は重に麻布我善坊町邊より山の手に在り、內職人募集の看板を掛けたる處も多し

●古靴下をホゴス事、是は古い靴下の役に立たぬ處を切りすて其の上にて殘りたる處の糸をホゴスなり、手奇麗なとは云はれぬ仕事ゆゑ家と人とに依りては不都合なるべけれど利益は可也なるべし、一ダスの手間賃四錢ぐらゐにして一日に二ダス以上は出來るなり、又切り捨てたる處は內職人の利益にして一貫目六錢ぐらいには賣るなり（是は荒物屋の仕入雑巾などの中に入れる也）

社交一斑

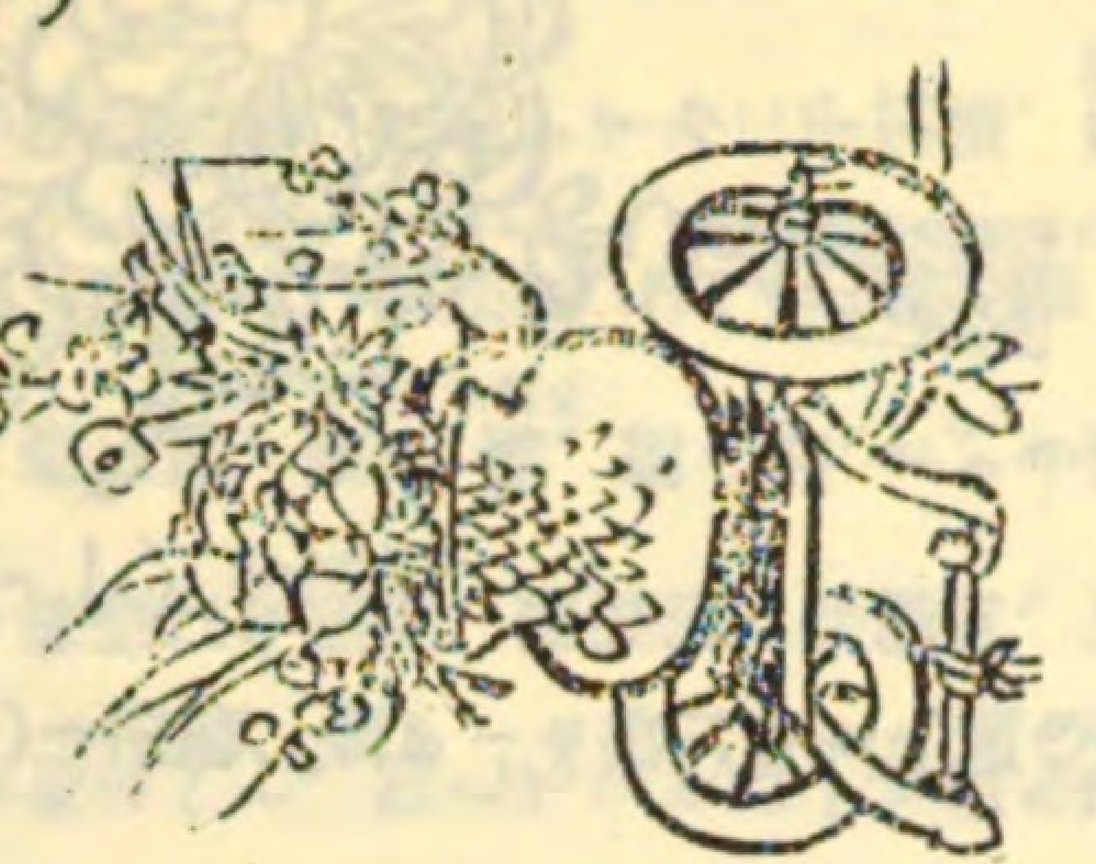
流行の栞

流行子

新春髮具

來る新春の都の錦、少女の頭髮には、如何に可憐の花簪が飾らるゝか、繪樣によりて讀者に告げまゐらすべし

（一）



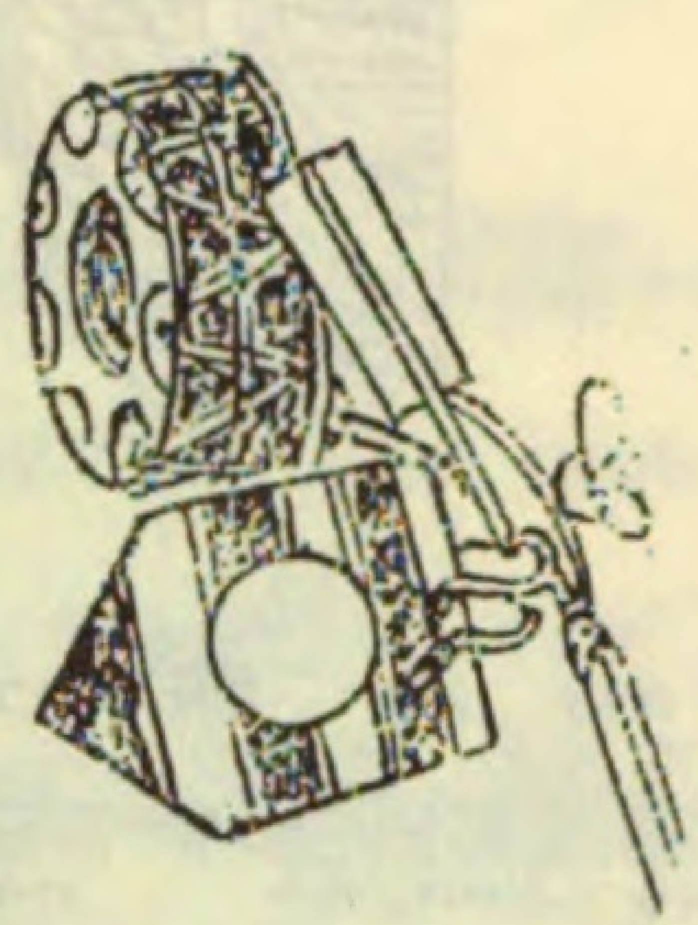
（二）



（一）は花籠車、花は金モールさつまみ製、籠はつまみ（假一圓十錢位）

（二）は梅よせの楠玉、金銀モール、紅、白、萌黄の縮緬細工（假六十錢位）

（三）



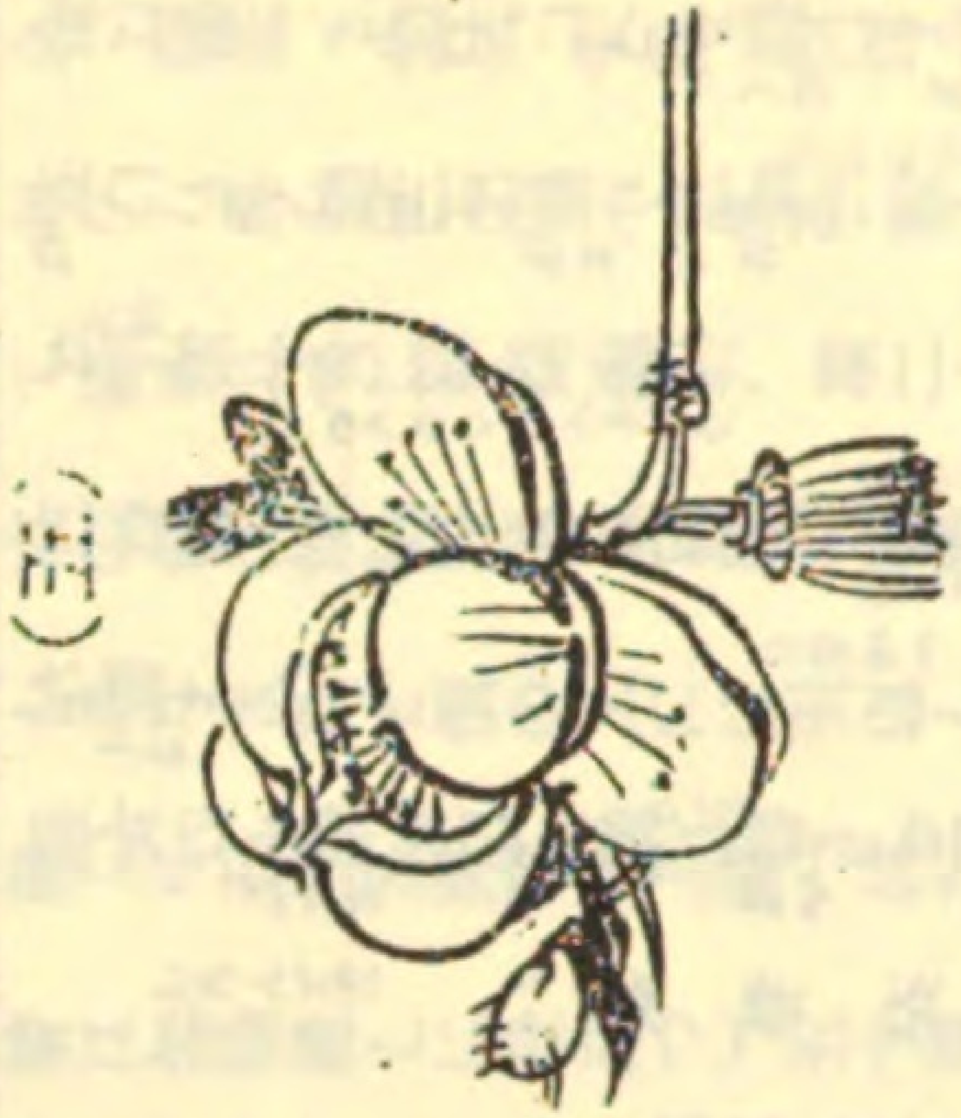
（四）



（三）は「さんばさう」、金銀モールをあしらひ、鼓、烏帽子、末廣共にちりめん細工（四十五六錢）

（四）は笑ひ梅、金銀モールに紅縮緬細工なり（五十錢前後）

（五）



（六）



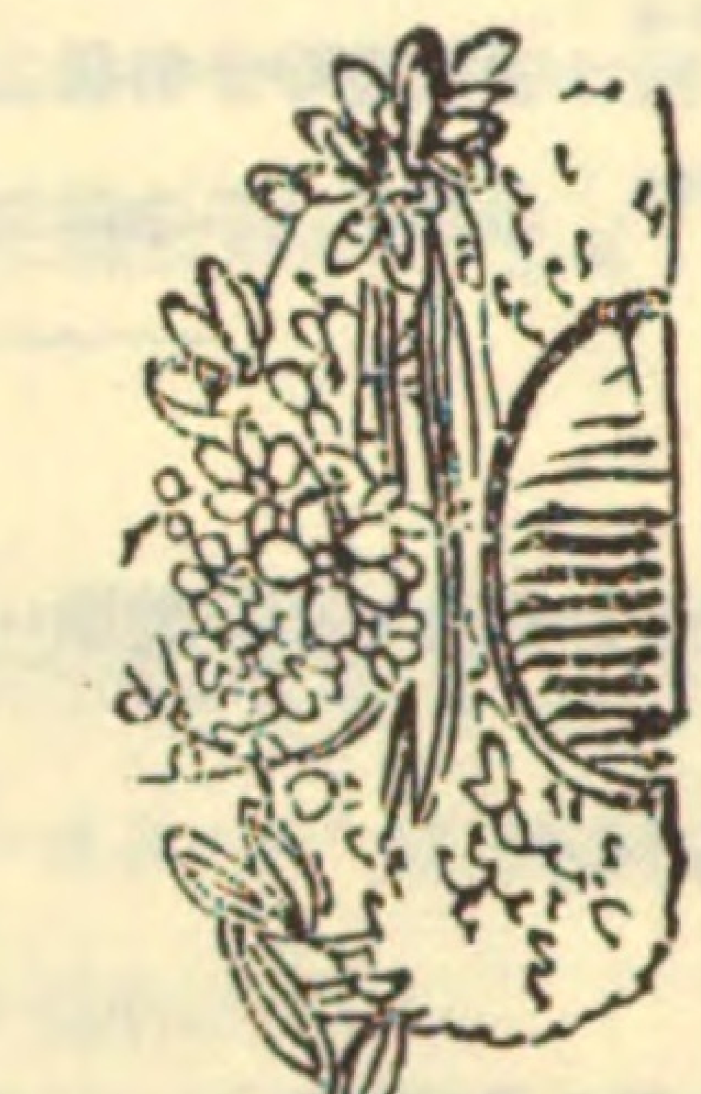
（五）は木蓮、紅縮緬製一種可憐の作なり（二十錢前後）

（六）は福壽草、金銀モール製小形（四五十錢）

（七）



（八）

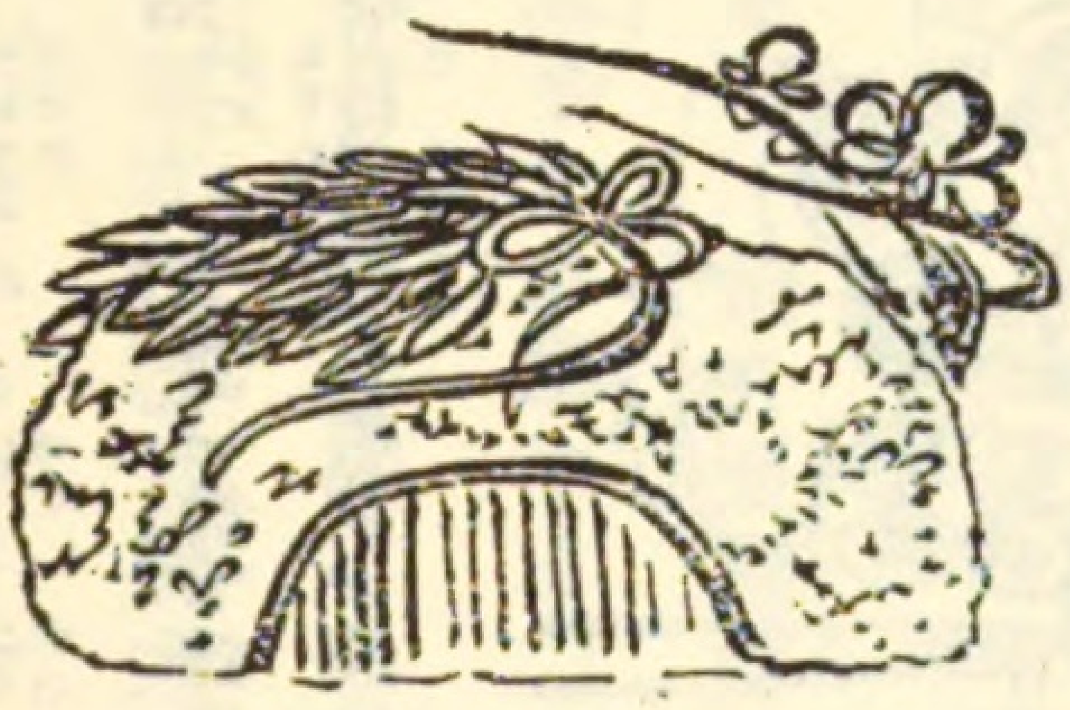


（七）は向挿にして梅よせに鶴、縮緬のつまみ製なり（三十五六錢）
（八）は花櫛にして楠玉模樣、房は金銀モール製（價一圓內外）
（九）は同じく花櫛にして、金モールの總張につまみ菊模樣（一圓五六十錢位）

（九）

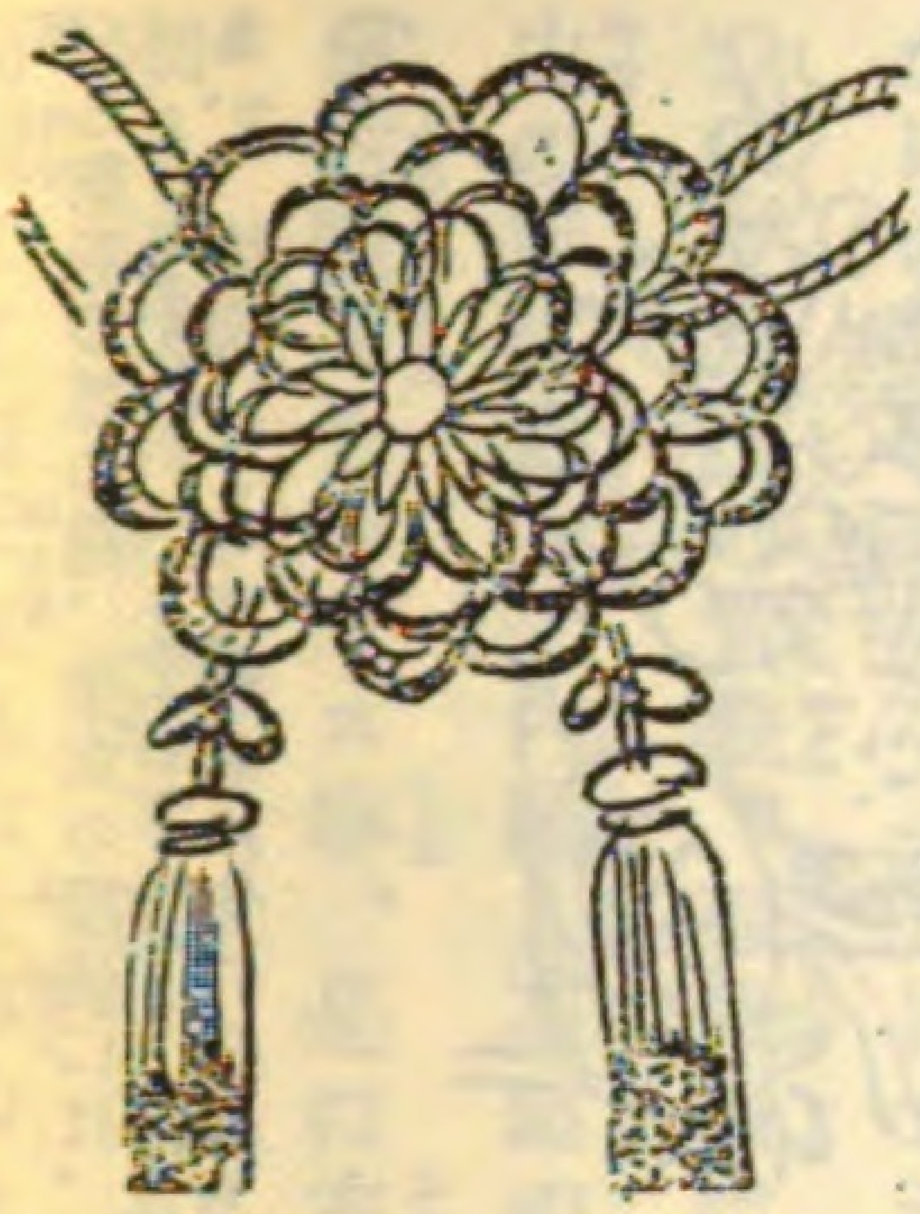


（十）



（十）も花櫛、金モール梅につまみ製の羽衣（五十錢位）

（十一）



（十二）



（十一）これ最も新形にして必らず需用多かるべし、八重梅模樣の唐人髷根掛なり進物用には適當のもの（四十錢內外）
（十二）これも唐人髷根かけ、つまみ製一重梅
前記花櫛及向櫛を除き房は絹にて紅白又は白と藤紫に限るが如し（京橋區尾張町松田白牡丹本舖報）

◎大西白牡丹　京橋區南傳馬町大西白牡丹にては他の小間物商に率先し、指環、帶止金具、簪等の金性製作を引受け一種の保險を以て右品を販賣すると言へば顧客も危險の患なかるべし

新春衣裳

男女の小袖は巳に報し參らせ置きぬれば、こゝには專ら婦人の三枚襲を記さん

三枚襲――府下各呉服屋に昨今注文多きものを春衣の流行として案內せば第一色縮緬模樣、第二小紋縮緬、第三黑縮緬の模樣に白無垢の襲衣にして第三は餘り地味に傾くの觀あるより他に比して注文尠ければ余は第一と第二につき詳しく案內し參らすべし

第一則ち色縮緬の模樣を分ちて三種とす一はフキ模樣二は裾模樣三は江戸褄而して一の流行の色の柄とはフキ模樣に於て千歲、藍、氣鼠、深川

鼠、利久の色に折鶴に若松、結び柳にこぼれ梅、若松に飛びつる、根生松にやぶこうじ、四君子、こぼれ松竹梅にして裾模樣は銀鼠、鼠淺黄、鳩羽、裏羽鼠、櫻鼠、素鼠に古代松竹梅、こぼれ松葉に蛤、鶴龜もどきの松竹梅、遠山かすみに千羽鶴、蓬萊山、枝垂櫻等、江戸褄は櫻鼠、淡利久、貴族鼠、古代紫、御納戸鼠、媚茶等に桐に鳳凰、松に蔦、梅に柳、雨に燕、雪に竹、まがき菊等最も人望多きが如し

フキ模樣は令閨向、裾模樣は令孃向、江戸褄は花柳社會に適するものと知るべし、而してフキは一寸位を最も高尚の好みとし、紋は三個所七分五個所三分の割合にて流行界に其勢力を奮ひ、其紋の大きさは七分五厘より九分まで最も多數なり、總じて本年の流行は模樣も色も派手なるが故に淡色の好み最も多かり、中には古代に返りて二十餘年前に大流行を極めし御納戸鼠、古代紫、媚茶の色に古代模樣を染むるを好む向も尠からず

右一襲の代價を聞くに胴拔三枚かされ又は比翼仕立にして五十圓より六十圓、或る場合により二枚重にて着せらるゝやうにワザと上着と下着の色を替へ中着を通しにせば六十圓より七十五圓に至るといふ、さて第二の流行即ち小紋縮緬は令孃間には需用尠なく重に令閨向なり、(素より花柳社會のものも着る) 其流行の色と柄は令閨向にて兼房になまこ、割山椒、鼠返しに大小あられ、又は屋根板、淡鼠に角通し、利久に七寶くづし、青海波、千歳に萬筋、さつま筋、小櫻等にして令孃向には淡利久、媚茶、小豆、千歳、淡藤、お納戸等のよろけ、子持筋、立わく、松川びし及おぼろ染(一名高砂染と言ひ小紋の內、菊、牡丹等をくづして染め出せしもの)等

右の價は無論引返しなれど華美なる小紋に至りては無地の裾廻しを好むもありされど價の上には引返しの三枚と同一なりといふ即ち一襲四十五圓より五十五圓若し上着一枚を裾模樣に好み下着二枚を小紋にせば(中着は無論通しに仕立つ)五十圓より六十圓に至ると聞けり

男子の儀式的三枚襲に上着を黑の三紋若しくは五ツ紋にして下着二枚を縞市樂を合はすやうに聞けどこれは婚禮以上の場合にあらざれば着するもの至つて尠く大抵は縞の三枚重又は二枚重のやうなり詳しくは前々號に記したればコヽには省きぬ但し袴は未だ案內せざりしゆゑ一寸記す

袴

藍と茶の棒縞は餘り地味なる故にや昨今の流行は淡色の珍縞にして八王子製産の練仙臺平或は博多平の二種にとゞめをさす、裏は無地の甲斐絹にして仕立上り大低十二三圓より以上二十圓位なりとぞ

淡泊にして且つ丈夫なるは西陣織の綿緞子なり、これは媚茶色に藍さ小豆をもて龍、桐に鳳凰等の模様を精巧に織り出せしもの、此品に上綿を普通に入れて仕立つれば一枚四五十錢にて高尚にして經濟的ものた得らろ大きさは一尺四五寸さ一尺七八寸さの二種あり、大なる方は此價格より二三割上る）次は博多錦にして地色は茶色に限れるが如し、模様は前記同様、（價は一枚二圓七八十錢）次は銘線、節八端、秩父の黄なる撚子縞等（價は一枚一圓二十錢乃至一圓五十錢）次は鼠無地の大巾縮緬を巾一ばいに仕立しもの（價一枚二圓五十錢乃至三圓平民的なるは、綿毛繻子の更紗（八十錢前後）金巾更紗（四十錢前後）木綿更紗（三十錢前後）天鵞絨（四五十錢前後但し此分綿代算せす）

雜　錄

摸範とすべき美談

仄に聞く所によれば立見少將夫人舊岡山縣代議士坂田丈平氏夫人其他名ある士の令閨諸子は各々其家庭事務の餘暇を以て、毛糸編物の內職に從事し、一日二十錢內外の賃錢を得られければ或人右の夫人等に向ひ、卿等は上等社會の家庭の主婦にてありつるに、日々齷齪と內職せらるゝは如何にとありしに、夫人等曰く、內職をせずとも夫の力によりて不自由なくば暮らし行かるゝ身なれど、妾等が斯く夙に起き夜は燈火と親みて漸く廿錢內外の働きを試むるは、廣き世の中の婦女子達が妾等の行ひを見て一刻も早く內職の働きにつき、內助の效を家政の上にあらはさんことを促すためなりと答へきとなん、果然吾人婦人の職業を勸告する平生の議論は今や實行となり、近來世間に內職を尊ぶ婦人多きに至りしは、國家の爲に一大慶事と言はざるべからず、希はくば右の夫人達の行を摸範とし玉へ、

又山形縣羽前國南置賜郡南原村大字石垣町に大比頁秀子（三十二歲）と呼ぶ婦人あり目下米澤市立町神明社內

に於て產婆を營みけるが同地方の產婆は言ふに言はれぬ弊害あるを見聞して大に痛嘆し是非とも矯正を計らざるべからずとて奮然鄕里を出て明治十八年山形市に設けらるゝ濟生館に身を投じ同二十年同館を卒業し二十二年に至り產婆試驗委員を命ぜられ今尙同職を奉ぜり然るに不幸にも本年は本市に惡疫侵入し一時は非常に猛勢を逞ふせしより當市役所にては同婦人の平素義俠心に富めるを探知し同氏を問ひ懇切に今回避病院の看護婦たらんことを依賴せしに疫病の危險にも憶せず喜びて承諾し遂に身を避病院に投じ自宅には自ら給料を與へて他の產婆を雇ひて留守を托し鋭意懇到患者を看護せしかば本市の檢疫員を初め市醫一同も秀子の勵きを賞嘆せざるものあらざりしといふ惡疫も彌々撲滅同病院を閉鎖することゝなり爲めに檢疫支部にては同氏に對し懇切なる謝辭を演べ報酬として金四圓五十錢を與へられしかば同氏は元より金錢の爲めに身を勞せしに非らざれば該金は受納致されずとて堅く受けざるも掛員は再三受納を乞ひけるに默しがたく則ち該金を受納し直に市長に向つて妾は金錢の爲めに看護せしにはあらず市民の爲め國家の爲めに聊か盡力せし次第なれば三圓は恤兵部に獻納一圓は虎列剌豫防費に義捐五十錢は凱旋兵慰勞に寄附の徽志なりとて四圓五十錢の金は殘らず寄附獻納せりと云ふ這も亦模範とすべき美譚なるかな(在米澤米散子報)

臺灣の風習

在臺灣　松琴生

滯營の餘暇臺灣土人の風習に付き見聞したるもの一二申上候然し重もに彰化近邊の見聞に候得者其考へにて御覧可被下候

◉婚姻・媒介人ありて意を婚家に通じ兩家共男女の容

姿性格を驗し、許否を決し候者我國と異なり不申候。而して淸目、秀眉、直鼻、小口、長髮、幼肉、小脚にして從順篤實なるもの是れ女に要する良好なる性格に有之。淸姿温容にして資性温良、學識才能あり、阿片を喫せず、酒色を嗜まず、賭博等を爲さゞる者、是男子に要する性格との事に候。兩家意相合ふ、男家より花簪、指輪、腕輪等を送りて以て約定の印となし、猶銀、豚、羊、酒、冬瓜、氷糖等を送り候由。銀は多きは一百元少きは四五十元にて是は身代と稱して、幼時養育の資に報ずるの意に有之候、而して多くは賣卜者等に依つて定められたる吉日に式を擧げ候由、愈當日となるや女は紅粉を凝らし親戚緣者に擁せられ。轎「竹のこし」に乘じて男家に到り候。男家の門に到り轎を止むるや、男は盛裝出で來りて靴を上げて轎門を蹴り候由是は生涯男子に服從す可き徵證の爲めとの事に候、這時轎前に火を焚く、同時に一老女(最も子孫多き者)出で來りて女を轎より扶け出し煙の下を過ぎて家內に進み入り候家內には男の緣者朋友等有之女を迎へ候、女は家內に進みて直ちに庖廚に入り茶を煎して客に供す客は之を受けて喫し終るや各自銀錢若干宛を茶碗に容れて女に送り候、了りて盛宴を張る夜に入りて客散ずるや房中男女相對して酒を酌む之を婚酒と申候然る後合衾の禮を擧ぐる由に有之候

◎學校　學校は我國維新前の寺子屋風にて一師數十人を敎ゆるものに候、學生は男子のみにて女子は皆無と云ふも不可なく候、稀れには富家の女が師を招きて學ぶもの有之候由、敎師は世襲のものも有之又一代敎師たるものも有之候彼等は先生と稱せられて頗る尊敬を受け居り候、而して其敎師たる特徵として十指の爪を延ばし居り長きは七八寸位有之候是は勞働者と區別する徵しの由何れも仙人氣取にて敵狀等に付き問試み候得者「我是讀書の人世事を知らず」とすまし居り候。

或る時「讀書人」と謂へる人に糧米の餘りを與へんとしたるに。市街を携へ行くは外見が悪いと申して受け不申候。

學生の入學せんとするや先づ雞卵一個青葱一束、金紙(紙を二寸四方位に切り中央に少許の金粉を粘し拜神に用ゆ)香灼(細き竹に香を塗りたるもの)を携へて師家に至り金紙香灼を焚きて孔子の像を拜し。然る後兩足を開展して、其間より雞卵を後方へ轉ず、之は將來學業發達如何を卜するものにて、直線に轉ずるは宜しく曲れば悪しき由に候。又青葱は像前に供へたる後携へ回り、自家の庭前に植ゑ置候由、之も轉卵と同旨にて繁茂するは宜しき徴との事、倘束脩として多きは一二元少なきは四五十錢を送り候由。

而して業を受くる概ね一日五時間午前八時頃より十一時頃迄(讀書)午後一時より二時頃迄(習字作文)三時より四時頃迄(讀書)併し時間は確實のものには無之候。算術の科は通常の學校には、無之、されば算術を學ばんとするものは別に師を求め候由學級もなく試業もなく只教師の見込にて順次高尚に進む。

讀書は最初に三字經次に四書五經と順次進み行き候由、小學校なるべし十歳前後の小童が大學中庸等を口移しに誦讀しあるを見受申候又或所には拾七八歳位の壯年の學び居るを見受申候之は我國の中學位なるべしと存候。

習字は詩經或は古文等より一章或は數句を摘出し小紙に書して生徒に與へ生徒は之を引寫し居り候又木板摺の赤字の草紙有之其上を墨にて習ひ居り候時に白紙に清書せしめ赤墨にて直しくれ候。

作文は最初に作法を敎へ漸次自作せしめて添作を加へ後には作詩をも敎へ候由小學位にても問題等は中々六ケ敷ものに候。

謝儀は生徒の力に應じて不定なれども小學位にても少くとも一年三四元を送り進むに隨ひて一年二三十元を

贈るものも有之候由。
又貧者の爲めに官設のものあり之は束脩謝儀を要せざるものにて我國の簡易學校の如きものに候教授法科目等は大同小異との事に候。
市街等には官。別に一教師を置きて懸賞文を徵し候由文章は何にても隨意にて之を上中下の三等に區別し上は四五元中は二三元の賞金有之候之は一月間數回ありて優等者は月に十四五元を得ることも有之候之は小試と稱し官試と稱するが所謂學士の法に有之候
彰化にて一教師を訪ひたるに左手の拇指に石にて造りたる長大なる指輪をはめ居り候表面には種々の彫刻を施し內部は銀にて包み中々美麗のものに候通常の裝飾品と存候處之は生徒の頭を叩きて怠惰を戒むる懲戒具との事に有之候彼曰はく一鞭等にて打てば生徒を傷くるの恐れあり素手にては自分が痛し是なれば兩得也」と一寸考へたものに候余に與へ吳れずやと云へば之は先師よりの讓り物なり」とて措しみ居り候宜しきは價拾二三元との事に候先づは大畧如斯に御坐候。

◎羽子板の景氣　本年は昨年に比すれば總体に物價騰貴の折柄なれど十軒店其他の羽子板商は既に夏の中に木地の製造をなし置きし上昨今桐材の直も別段の變りなく唯職人の手間と裂地に多少の差違ある位の事なれば下等物は一割五分方上等物は一割程の高價に過ぎざる故先づ賣安き見込なりと今各商店等の小賣相場を聞くに下等尺物六錢、小相尺一物八錢、大相尺二物十錢、大相鹿の子十二錢、同天卷十五錢、小京十八錢、大京三十錢等にて其の七分は田舍行きなり新狂言物は孫板即ち尺五寸物にて一人立七八十錢から一圓十錢位迄、尺八寸物は一人或は二人立にて一圓三十錢より二圓迄、二尺物は二人或は三人立にて二圓五十錢より三圓迄なり誂物は畫面の都合もあれど普通五圓內外にて昨年は軍人の圖などありしも本年は背負物のある爲め夫等は製造するものなし板繪は例によりて團十郎、菊五郎、左團次、九藏、芝翫、權十郎、福助、米藏、秀調、片市、松助、菊之助等なるが一人立にて賣口能き見込みの物は歌舞伎座物にて暫、明治座物にて熊谷、景清、新富座物にて辨天小僧等也又二人立は歌舞伎座物の床下、暫、宮內の局、明治座物の鈴ケ森、鞘引、熊谷陣屋、同組打、大杯等、新富座物の骨寄せの岩藤、三代記、名人長次、對牛樓、五斗、三人立は曾我の討入、熊谷陣屋、七段目、布引瀧、菊畑、車引等なり招きの大板は菊畑の五人立、鈴ケ森、對牛樓、熊谷陣屋、辨天小僧及び暫の顏出しとも十人立の物杯にて是は買入に依つて直の極るべきものなり
羽根は本年は軍隊の凱旋を祝し國旗、聯隊旗等を附けしものあり相場はバラ羽根、串羽根とも一本に付一錢より五錢まで新形（國旗等をつけし物）一本三錢位にて景氣は中々好き模樣なり

歌苑

落葉　（在金城　天涯生）

風さそふ峯の紅葉ちらなくば立田の川も錦せましな

山路落葉　（月の舍）

夕日かけいつしか入りて紅葉の雨さこそふれ山の下みち

夜時雨　（徳美公俔）

さよ更て渚にさわぐ水鳥の聲も淋しく時雨ふるなり

木からし　（筑峯女史）

木からしは吹きいそぐさも紅葉の赤き心は散らさずさもかな

枯野　（桃蹊生）

千草さく野邊はいつしかかれはてゝ秋みし蝶の夢もさゞめず

夢　（同人）

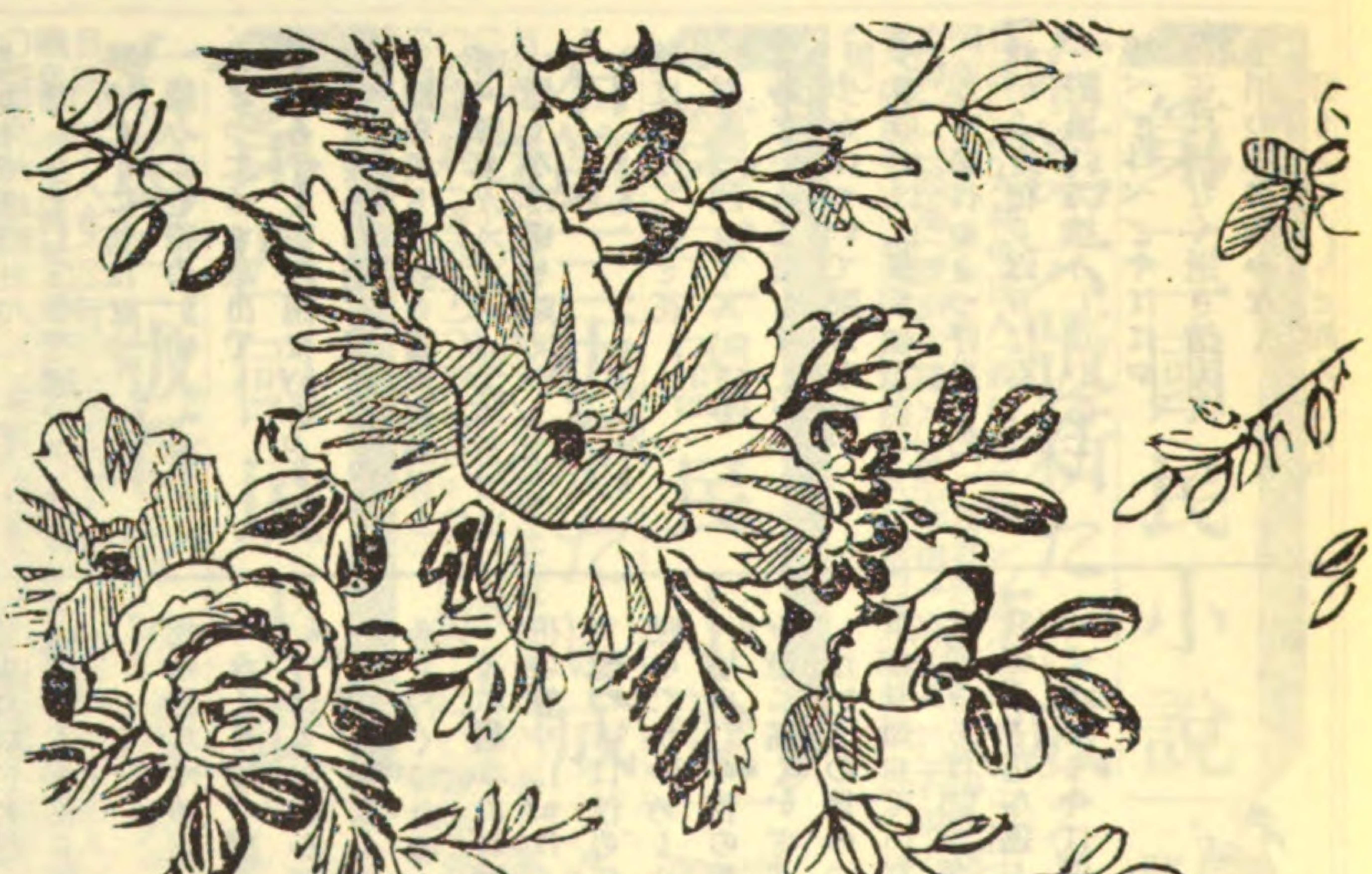
うれしきもかなしきも亦夢にしてさむればもさの我身なりけり

初雪　（信濃　白虎生）

年々に降る雪なれどめづらしさなかめ見あかぬ庭のはつ雪

漁村冬月　（水田みづほ）

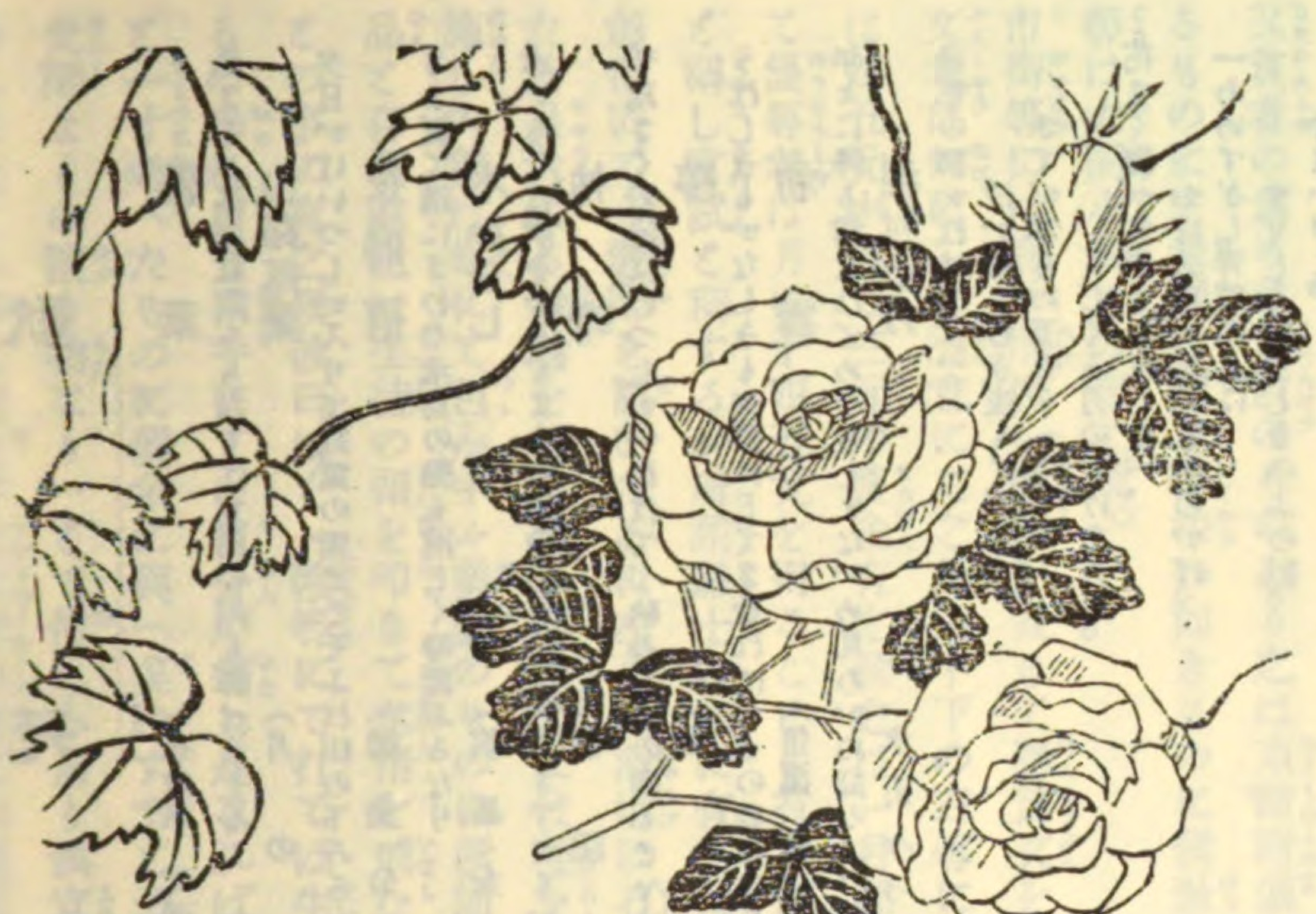
漁邨の柳かれはてゝ、
　汐かぜさむき夜もすがら、
　さすが氷らぬ浪のうへに、
　　くだくる月のかげ寒し。
花さく野べにゆきくれし夕べ、
　おぼろにかすみし昔のかげ。
一あめすぎし靑葉の上に、
　すゞしく宿りしきのふの影。
今はいづこ。
　かはればかはるならひにて。」



（一）西陣製出新意匠西洋婦人服

投げし薔薇花　（栗宮八十彦）

底澄み渡る谷川の
岸の草生を折敷きて
流れぞ絶えぬ水の面を
志ばし眺むる少女あり。



（二）西陣製出新意匠西洋婦人服

眉根ゆかしき童女(わらはめ)の
花の簪のかむばせに
櫻が枝の露ちりて
榮えひさしほの花冠。
袂ゆたかに匂はせつ
摘みにし花のかず〳〵を
ひとつ二つと取出でゝ
散らすも花の雨ながら。
少女は笑みぬ樂しげに
播きてちらせる薔薇花の
水のまに〳〵たゞよひて
逝くをば獨り眺めつゝ。

時は移りて花と花
浮きつ流るゝ其かげを
霎時ながめて居たりしが
少女はやがて眠ろみぬ。
夕日のかげに夢さめて
なさめはおきつ呼出でぬ
『我がよき花よ返らなん
野邊にて摘みし我が花よ』
呼べど叫べど今ははや
花は跡なく逝き消えて
小川の水は淀みなく
音もさや〳〵と流るなり。

茜根さす日の暮れたれど
今は去るしも泣く〳〵に
少女は叫びぬ悲しげに
『我がよき花よ返らなん』

世のたをやめよ汝もまだ
水より早く環る日の
かげにこゝろを迷はさば
果報(むくい)は來なんたちまちに。

過ぎ行く時針(はり)の一時を
それ譬ふれば薔薇花の
花の香りにかはらじな
棄つるは汝の任意(まゝ)にして。

世のたをやめよ心して
摘みたる花の香りをば
み空に高くかざすこそ
汝がこの世のつとめなれ。
斯るも知らでいたづらに
過ざるは媚て老いし時
『我がよき花を返して』と
よぶとも今は遲からん。

